

インダス文明の交易活動における印章

小磯 学

Seals Associated with Trade Activities from the Indus Valley Civilization

Manabu KOISO

インダス型印章（図1）は前3千年紀後半を中心とするインダス文明の交易活動の証である。一方その取引先であったメソポタミア地方やペルシャ（アラビア）湾岸などで使われた円筒形印章や円形のペルシャ湾型印章などにもインダス型印章と共通する図柄やインダス文字（未解読）を記したものがある。これらがインダス文明ときわめて密接な関係をもつ商人たちの所有物であったことは疑いがなく、本稿ではこうした印章を集成・比較検討することで、インダス文明の交易活動の実態把握の一助とすることを試みた。

情報が限られ断定は困難ではあったが、その結果さまざまな出自の商人たちの存在を確認するとともに、より明確に時期的な変遷を追うことができた。とくにアッカド期のメソポタミア地方にはインダス型印章の出土が集中しインダス文明の商人が直接当地を訪れていたことを示す。そしてそこには彼らから「派生・分家」したと思われる「短角のウシ」を記したペルシャ湾型印章を所持する商人たちも暮らしていた。その後インダス文明の商人らは当地から「撤収」するが、ペルシャ湾型印章の商人らはパハレーン島に本拠地を移し仲介交易に従事していたと思われる。

運ばれた商品以上に交易活動を直接物語る資料として、印章研究はさらなるデータと検討を必要とする。

キーワード：インダス型印章、隅丸方形印章、ペルシャ湾型印章、円筒形印章、プリズム形印章、「秣桶に頭を垂れた短角のウシ」

Examples of square Indus-type seals found in Mesopotamia, Oman and Turkmenistan, and other locales, are evidence of direct trade with the Indus Civilization. Along with Indus seals, cylinder, circular and triangular-prism seals, belonging to these regions have also been found. Though their shapes are regionally distinct, depiction of animals in the Indus style, along with Indus signs indicate close connections between these areas. Attributes from these seals are compiled and compared in order to gain a more accurate understanding of Indus trade activities. Each style of seal can be attributed to a specific group of merchants with different social backgrounds and origins. Finally, the assertion is made that trade activity during the Indus period was apparently a very complex phenomenon.

Key-words: Indus-type seals, square seal with round corners, Persian Gulf type seals, cylinder seals, triangular-prism seals, depiction of “a short-horned bull with lowered head over manger”

はじめに

印章は通常の交易品と異なり、所有者である商人の身分証明書としての役割をもつ。その形態の違いや印面に記した図柄や文字は各々の商人の所属する集団や出自、出身地を示す。印章の出土は、実際にそこに所有者の商人が赴き、廃棄・紛失などした可能性が高い。

本稿ではインダス文明の版図¹⁾外から発見されたインダス型印章と、それと図柄や文字などが共通する円筒形印章や円形印章などを集成・比較検討する。前3千年紀後半を



図1 インダス型印章（Shah and Parpola 1991）
印面は粘土に押捺したもの。

中心とするインダス文明と外世界との交易活動の把握が目的である。

またメソポタミア文明の楔形文書に登場する「メルッハ」をインダス文明に比定する解釈が有力であるが (Possehl 1996b)、交易品の記述はあっても、誰がそれに従事したかを示す情報は限られている。印章はそれを補う資料ともなる。

扱う印章は以下の通りである。

- (1) インダス文明版図外から発見されたインダス型印章：出土地はメソポタミア地方南部を中心に、一部オマーン湾岸やトルクメニスタン地方におよぶ。
- (2) インダス文明の版図外から発見されたインダス型印章の封泥・押捺痕：メソポタミア地方南部とイラン高原からの報告がある。
- (3) 隅丸方形印章：メソポタミア地方から1点のみの報告。角・側面が丸みを帯びた方形スタンプ型印章。
- (4) ベルシャ湾型印章：ベルシャ湾岸を中心に分布するスタンプ型円形印章。
- (5) 円筒形印章：メソポタミア地方のほか、インダス文明版図内からも出土。
- (6) プリズム形印章：やや細長いプリズム形(三角柱状)印章。オマーンとバハレーンからの報告がある。

まずこれらの印章に関する研究史を簡単に振り返っておく。

インダス型印章と共通する図柄・文字を記した各種印章の発見の系譜

1. 19世紀末～20世紀初頭

動物の独特な図柄と未知の文字を記した円筒形や円形の印章がテロー (Telloh)、スーサ (Susa) などで報告されていた²⁾。

2. 1920～40年代

現在のパキスタンのハラッパー (Harappa) とモヘンジョ・ダロ (Mohenjo daro) の発掘でインダス文明が発見された (Marshall 1924, 1931)。この文明を特徴づけるインダス型印章やその封泥がキシユ (Kish)、ウンマ (Umma)、スーサなどからもさらに発見され (Sayce 1924; Gadd and Smith 1924; Mackay 1925; Scheil 1925)、上記19世紀発見の印章がインダス文明のもの、あるいはこれと共通する要素をもつことが判明。類例もさらに増え、チャヌフ・ダロ (Chanhu daro) からも出土した (Langdon 1931; Mackay 1931b, 1938, 1943)。

すでにG. R. ハンター (Hunter 1932) は円形印章のインダス文字の配列に着目し、インダス文明出土例では「インダス語」、メソポタミア文明出土例ではシュメール語

などの可能性が高いとした。

またC. J. ガッド (Gadd 1932) はウル (Ur) 出土資料を主体にインダス文明の影響を受けた印章集成を行う。図柄や鈕の形態に基づき円形印章が2類型に分類できることを指摘。

3. 1950～70年代

ベルシャ湾岸のバハレーン島カラート・アル・バハレーン (Qala'at al-Bahrain) やファイラカ島テル・サアド (Tell Sa'ad) などでメソポタミア地方と同種の円形印章が出土 (Bibby 1958; Potts 1992: 160)。製作址も発見され、メソポタミアの粘土板文書に登場する「ディルムン (ティルムン)」をバハレーン島とする解釈を裏づけた (Oppenheim 1954; ピビー 1975)。またM. ウィーラー (Wheeler 1958) はこれらの円形印章を初めて「ベルシャ湾」印章と総称した。

その後W. ハローとB. ブキャナンが円形印章の定義づけを行う (Hallo and Buchanan 1965)。

ベルシャ湾型-前期型。インダス文字のほか、図柄にはインダス型印章と共通するウシのほか、ヤギやトリ、サソリ、「人の足跡」が多い。裏面の鈕はインダス型印章と共通 (インダス型鈕) で、半球状に高く盛り上がり中央に深い沈線を通常1本施す。多くがバハレーン島から出土 (今日まで110点以上の報告³⁾)。

ディルムン (ティルムン) 型-後期型。図柄には人物や幾何学文が多く、細工がより精巧で細かい。動物には大きな目を強調した頭部が特徴のレイヨウが多い。文字は稀。インダス型印章と共通する要素は希薄で、地域性・独自性が強くなる。鈕は低いドーム状で、中央に浅く施された通常3本の沈線とその両側に2つずつの同心円文を配す (ディルムン型鈕)。多くがファイラカ島から出土 (今日まで600点以上の報告⁴⁾) (図2)。

今日でもこの分類は有効である⁵⁾。

一方イラン高原はケルマーン地方のテペ・ヤヒヤー (Tepe Yahya) A期 (エラム期) からインダス型印章の押捺痕を残す土器片が、またアルティン=デペ (Altyn-Depe) からは2点のインダス型印章が出土した (Masson 1988: 68, 118; 1999: 234; During Caspers 1998)。メソポタミア地方につづき、その版図外から発見されたインダス型印章となった。

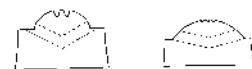


図2 ベルシャ湾型印章 (左) ・ディルムン型印章 (右) 断面図 (Kjærum 1994)

4. 1980年代～現在

オマーン湾岸のラス・アル・ジュネーズ (Ra's al-Junayz) II期 (前2400～2200年頃) から1点の銅製インダス型印章やインダス文字を線刻した土器片などが出土 (Cleuziou et al. 1990; Cleuziou and Mery 2002; Collon 1996: 10a, 10b; Nayeem 1992: 266)。またオマーン内陸のマイサル (Maysar) とバハレーン島のアル・ハジャル (Al-Hajjar) からは動物やインダス文字を記した三角柱状のプリズム形印章が出土 (Weisgerber 1984; Potts 1992: 110-113; Nayeem 1992: 262-267; During Caspers 1998)。

こうした成果をふまえていくつかの集成がある⁶⁾。まず T. C. ミッチェル (Mitchell 1986) がウルの資料の編年的位置づけを確認し以下の3類に分類した。

- 1類-図柄に「インダス様式」の動物とインダス文字。円形印章。主にアッカド期 (前2350～2150年頃)。
- 2類-インダスの図柄を粗く模して記す。円筒形、円形、隅丸方形印章。主にアッカド期。
- 3類-インダスとの関連は薄くなり、独自の表現の人物、文様などを記す。円筒形、円形印章。主にイシン・ラルサ期 (前2000～1800年頃)。

1類と3類はそれぞれハローらのベルシャ湾型とディルムン型とにほぼ相当する。2類を1類から3類への編年上の過渡期とするか、始めから1類と共存とするかは判断材料が乏しい。ウルだけでなく他の地方の広い範囲に及ぶ比較検討が課題となる。

R. H. ブルンスウィッグ他 (Brunswick et al. 1983) の集成では、カラート・アル・バハレーンII期で出土した粘土板文書に基づきバハレーンのベルシャ湾型印章の出現をウル第3王朝後からイシン・ラルサ期初頭の前2050～1900年頃と特定した。またこれらの印章のインダス文字がインダス語ではないと改めて指摘。板楔形文書に記述のある古代都市テロー (ギルス Girsu) 近郊の「メルッハ村」に住むインダス文明出身の「帰化人」がこれらの印章の所有者であったと推測 (Parpola et al. 1977)。

これを補足するため、さらに文字を重視した集成をおこなったのが A. パルポラ (Parpola 1994a) である。インダス文字を記す印章41点の文字の配列を分析しインダス語であるか否か推測、4類型 (以下では便宜的にA～D類とした) を設定した。

- A類: 文字の配列がインダス文明の文字資料 (主に印章) とほぼ完全に一致し、インダス語と考えられる。
- B類: インダス文明で類例のない文字を含む場合があるが、概ねインダス語である可能性が高い。
- C類: インダス文字を用いているがインダス文明に一致する配列が見られず、インダス語である可能性が低い。その出土地で用いられた言語と思われる。

D類: 前例のない文字の多用。または破損して判断ができない。

上記の集成では、限定した出土資料、図がないなど不十分な面もある。このため本稿では印面の形態 (方形・隅丸方形・円形) と印章全体の形態 (円筒形・プリズム形)、また印面の図柄を考慮して、インダス型印章の影響が顕著な総数70点の印章を集成し比較検討を行う。ただしパルポラの文字配列の類型は本稿でも援用した。

インダス文明の版図外から発見されたインダス型印章

インダス文明の標識遺物であるインダス型印章は印面上半部にインダス文字、下半部に一角獣やコブウシ、「秣桶に頭を垂れた短角のウシ」 (図1)、トラなどの動物のほか各種図柄が記される (Joshi and Parpola 1987; Shah and Parpola 1991)。前2600年頃からインダス文明が衰退を始める前2000年頃までほぼ継続的に用いられたとされる⁷⁾。オマーン湾岸1点、メソポタミア地方南部6点、トルクメニスタン地方2点の計9点の報告がある (図3、4)。

1. オマーン湾岸 (図3、図5-1、表1)

銅製の印章がラス・アル・ジュネーズII期 (前2400～2200年頃) の住居内から出土。鏽のため図柄はX線写真に基づく類推であるが、インダス文明で最も多い「供物柱を伴う一角獣」であろう (Cleuziou et al. 1990: 14; Cleuziou 1992: 97)。裏面の鈕は通常とは異なるが金属製印章に類例がある⁸⁾。また文字の配列は文明版図内に類例がありA類・インダス語という (Parpola 1994a: No.2)。つまり本例はインダス文明の純正品である可能性が高い。希少な金属製は所有者の社会的地位を示すものであろうか。

2. メソポタミア地方南部 (図3、図5-2～7、表1)

テロー、ニップール (Nippur) などから6点の出土。「秣桶を伴うトラ」 (図5-2)、コブウシ (図5-3)、一角獣 (図5-4～7) はインダス文明でも多い。文字はA類のインダス語 (Parpola 1994a)。裏面の鈕もすべてインダス型。キシユの神殿出土の図5-4は伴出した楔形文書からアッカド朝サルゴン王以降、同じくキシユの図5-5は初期シュメール期ないし漠然と前19世紀以前とされる。ニップールからの図5-3は前14世紀頃のカッシート期の家屋覆土出土ながら、本来は前3千年紀後半に帰属するものであろうという (Gibson 1977; Chakrabarti 1978; Wheeler 1979: 117)。

3. トルクメニスタン地方 (図5-8・9、表1)

アルティン=デベ (図3) からの2点がある。卍文を記

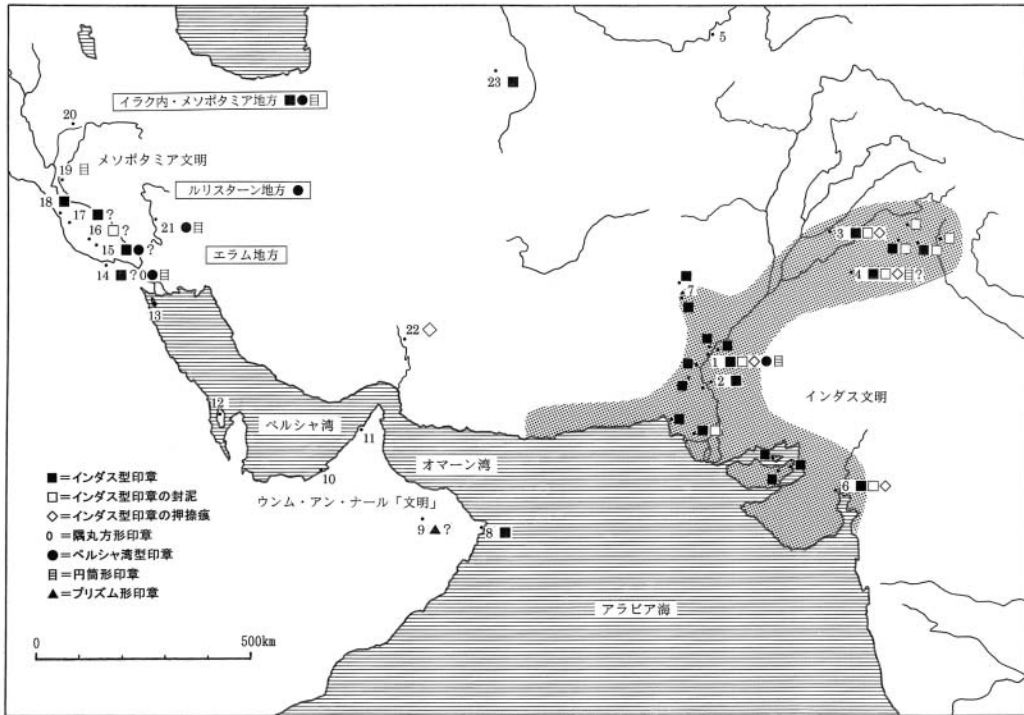


図3 前2400～2200年頃 インダス型印章およびその影響が見られる各種印章出土地

- 1 モヘンジョ・ダロ 2 チャヌフ・ダロ 3 ハラッパー 4 カーリーバンガン 5 ショルトガイ 6 ロータル 7 スィブ・ダンブ
 8 ラス・アル＝ジュネーズ 9 マイサル 10 ウンム・アン・ナール 11 テル・アブラク 12 バハレーン島 13 ファイラカ島
 14 ウル 15 テロー 16 ウンマ 17 ニップール 18 キシュ 19 テル・アスマル 20 テル・スレイマー 21 スーサ 22 テベ・ヤ
 ヒヤー 23 アルティン＝デベ

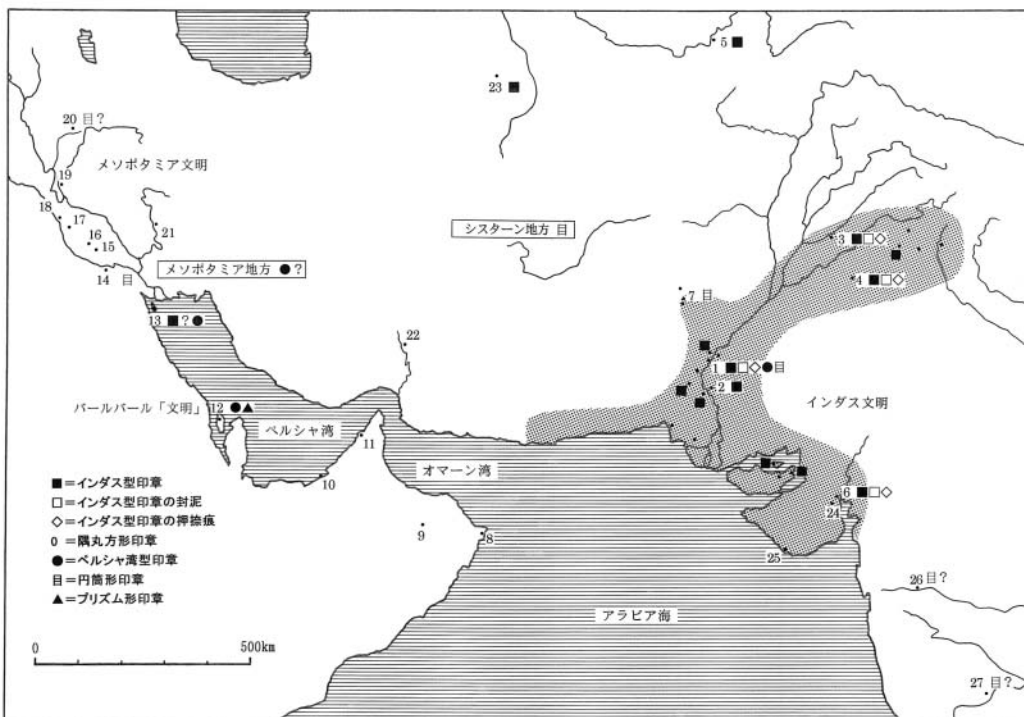


図4 前2200～1800年頃 インダス型印章およびその影響が見られる各種印章出土地

- 1 モヘンジョ・ダロ 2 チャヌフ・ダロ 3 ハラッパー 4 カーリーバンガン 5 ショルトガイ 6 ロータル 7 スィブリ・ダンブ
 8 ラス・アル＝ジュネーズ 9 マイサル 10 ウンム・アン・ナール 11 テル・アブラク 12 バハレーン島 13 ファイラカ島
 14 ウル 15 テロー 16 ウンマ 17 ニップール 18 キシュ 19 テル・アスマル 20 テル・スレイマー 21 スーサ 22 テベ・ヤ
 ヒヤー 23 アルティン＝デベ 24 ラングブル 25 プラバース・パートン 26 ダイマーバード 27 マスキ

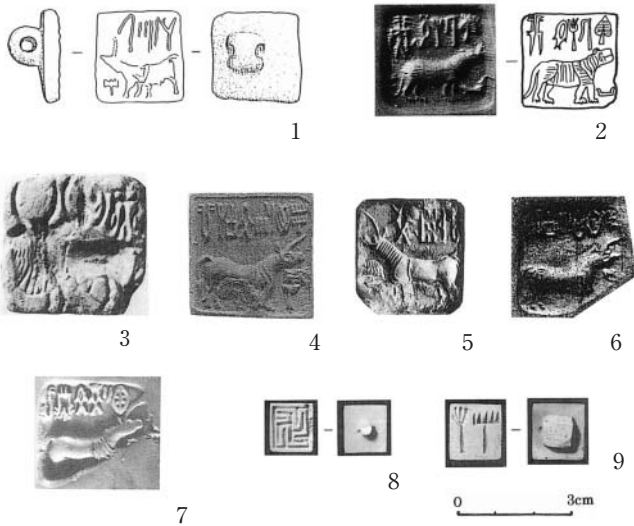


図5 インダス型印章：オマーン湾岸、メソポタミア地方、トルクメニスタン地方出土
(S = 1/2 ただし4は縮尺不同)

- 1 ラス・アル・ジュネーズ (Cleuziou et al. 1990)
- 2 テロー (Amiet 1988)
- 3 ニップール (Brunswig et al. 1983)
- 4 キシュ (Langdon 1931) 5 キシュ (Parpola 1994b)
- 6 イラク内 (Bissing 1927)
- 7 イラク内 (Brunswig et al. 1983)
- 8・9 アルティン・デベ (During-Caspers 1998)
2, 4, 6, 7は粘土に押捺したもの。

した図5-8は前2300年頃の神殿内「僧侶の集団墓」から出土。卍文はモヘンジョ・ダロやハラッパーなどで60点以上の事例がある (Joshi and Parpola 1987; Shah and Parpola 1991)。多くが小型で本例とも一致⁹⁾。裏面の円形の鈕もインダス文明に類例があり¹⁰⁾、むしろ卍文の印章固有の形状といえる。またインダス文明に印章の副葬例はなく、本例が副葬品であったとすればアルティン=デベの習慣に則ったものかもしれない。

一方インダス文字を2字記した図5-9は、前2千年期初頭の「エリートの家屋」からの出土 (Masson 1988: 68, 118; During Caspers 1998: 50-51)。図柄を省略する傾向にある文明末期の所産であろうか。鈕は未完成にも見えるがモヘンジョ・ダロやハラッパーなどに類例がある¹¹⁾。文字の配列はC類でインダス語の可能性が低く、当地の言語の可能性もある (Parpola 1994a: No.33)。

4. まとめ

- (1) インダス型印章はオマーン湾岸、メソポタミア地方南部、トルクメニスタン地方から出土し、インダス文明の商人が直接当地を訪れたことを示す。
- (2) オマーン湾岸出土例は銅製であり、所有者は社会的地位のある人物であったかもしれない。

表1 インダス型印章：オマーン湾岸、メソポタミア地方、トルクメニスタン地方出土

地方	出土地	図柄	文字	インダス文字の類型 (Parpola 1994a)	鈕	出土地点・状況	時期	材質	長×幅×高 mm	参照文献	図
オマーン湾岸	ラス・アル=ジュネーズ	一角獣、供物柱	インダス文字×4	A類	隅丸方形	RJ2, SU14, Building 1, Room VI.	c.2400-2200B.C.; II期	銅	24×22×7	Parpola 1994a: No.2; Cleuziou et al. 1990: 23; Cleuziou 1982: 97; Naveem 1996: 266- Fig.4	図5-1
メソポタミア	テロー	トラ?、まぐさ桶	インダス文字×6	A類	インダス型	不明	c.2300-2200B.C.	凍石	25×25×7	Parpola 1994a: No.24; Amiet 1988: No.A1; Collon 1996: 8a	図5-2
	ニップール	コブウシ	インダス文字×2	A類	インダス型	Area WC Trench1, debris on the floor of Kassite house.	c.14th century B.C.以前	白い石	38×38(7)	Brunswig et al. 1983: Pl.I-Fig.2; Parpola 1994a: No.26; Posselt 1996a: Fig.4	図5-3
	キシュ	一角獣、供物柱	インダス文字×8	A類	インダス型	神殿址、Trench C9	サルゴノ期以降	不明	不明	Parpola 1994a: No.27; Langdon 1931; Collon 1996: 9b	図5-4
	キシュ	一角獣、供物柱	インダス文字×3	A類	インダス型	Foundation of the chamber beneath 18th century B.C.	初期シュムエール〜前19世紀	凍石	28×30×8	Mackay 1925: Pl.X-I; Parpola 1994a: No.28; Posselt 1996a: Fig.4	図5-5
	イラク内?	一角獣、供物柱 (一部破損)	インダス文字×8	インダス文字×8	A類	不明	アッカド期以降?	凍石	30×30	Parpola 1994a: No.37; Bissing 1927	図5-6
	イラク内?	一角獣、供物柱 (一部破損)	インダス文字×6	インダス文字×6	A類	不明	アッカド期以降?	緑色の石	30×28×12	Parpola 1994a: No.40; Brunswig et al. 1983; Fig.1; Chakrabarti 1978	図5-7
トルクメニスタン	アルティン=デベ	卍×1	なし	--	円形	Excavation 7, Room 7, 僧侶の集団墓	c.2300年前後: Namazga IV-V transitional stage	アラバスター緑の白い石	11.5×13	Masson 1988: 68, 118, Pl.XXII-11; During Caspers 1998: Pl.III	図5-8
	アルティン=デベ	なし	インダス文字×2	C類	方形	Excavation 9, Location 105, エリートの家屋	前二千年期初頭: Namazga V末期	アラバスター緑の白い石	15×14×7	Masson 1988: 118, Pl.XXII-1a; Parpola 1994a: No.33; During Caspers 1998: Pl.III	図5-9

- (3) メソポタミア地方南部出土例の図柄は一角獣、コブウシ、トラとインダス文明と同じく多様である。時期は概ねアッカド期頃以降である。
- (4) アルティン=デベ出土例は小型で動物が記されず、鈕の形態も独特である。文字はインダス語である可能性が低い。卍文をシンボルとする特定の集団とも考えられる。また神殿付属の「僧侶の集団墓」や「エリートの家屋」からの出土は、特別な待遇を受ける立場にあったことを想像させる。
- (5) 以上の印章はインダス文明から直接現地を訪れた商人所有のもので、必要時には荷を開け確認し再び封をする権限をもっていたかもしれない。

圧痕を残す。時期は不明。文字の配列はA類 (Parpola 1994a: No.25)。滞在中のインダス商人が当地で押した可能性もある。

2. 押捺痕-イラン高原 (図3、図6-2、表2)

テベ・ヤヒヤー A 期 (前 2500 ~ 2200 年頃) の土器底部近くへの印章の押捺痕 (Lamberg-Karlovsky 1971b)。印章左上隅の2文字が残存。ただし図柄が欠損し、インダス文明の土器か確証もなく即断はできない。文字配列はB類という (Parpola 1994a: No.32)。同期には円筒印章やベルシヤ湾型印章も出土しており (Lamberg-Karlovsky 1970: 61-71; 1971a: 91)、東西交易の一端を示す。

インダス型印章の封泥・押捺痕

1. 封泥-メソポタミア地方南部 (図6-1、表2)

ウンマ (Umma) 出土と伝えられ、インダス文明から商品が運ばれたこと示す。一角獣の印章の封泥で裏面に布の

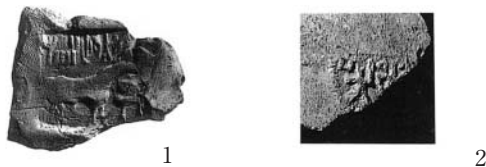


図6 インダス型印章の封泥・押捺痕：
メソポタミア地方、イラン高原出土 (縮尺不同)
1 ウンマ (Parpola 1994b)
2 テベ・ヤヒヤー (Lamberg-Karlovsky 1971b)

インダス文明と共通する図柄の隅丸方形印章

メソポタミア地方南部 (図7、表3)

ウル表採。各辺が丸みを帯びたやや縦長の方形のスタンブ印章。便宜的に隅丸方形印章と呼ぶ。図柄は「短角のウシ」であるが、性器や秣桶が省略され、頭の向きも通常と



図7 隅丸方形印章：メソポタミア地方出土 (S = 1/2)
ウル (Mitchell 1986; Collon 1996) 印面は粘土に押捺。

表2 インダス型印章の封泥・押捺痕：メソポタミア、イラン高原出土

地方	出土地	図柄	文字	インダス文字の 類型 (Parpola 1994a)	紐	出土地点・状況	時期	材質	長×幅×高 mm	参考文献	図
封泥											
メソポタミア	ウンマ	一角獣、供物柱	インダス文字×5	A類	不明	不明	アッカド期以降?	粘土	不明	Parpola 1994a: No.25; Possehl 1996a: Fig.3	図6-1
押捺痕											
イラン高原	テベ・ヤヒヤー	不明 (破損)	インダス文字×2	B類	不明	不明	c.2500-2200B.C.: IV A期	粘土	不明	Parpola 1994a: No.32; Lamberg-Karlovsky 1971b: Fig.1, 306	図6-2

表3 隅丸方形印章：メソポタミア出土

地方	出土地	図柄	文字	インダス文字の 類型 (Parpola 1994a)	紐	出土地点・状況	時期	材質	長×幅×高 mm	参考文献	図
メソポタミア	ウル	短角のウシ	楔形文字×3	—	方形	表面採集	c.2350B.C.以前	凍石	27×24×11	Wheeler 1979: 117; Mitchell 1986: No.7; Collon 1996: 15g; NHK他 2000: No.728	図7

表4 インダス型印章の可能性が高いその他の方形印章

地方	出土地	図柄	文字	インダス文字の 類型 (Parpola 1994a)	紐	出土地点・状況	時期	材質	長×幅×高 mm	参考文献	図
メソポタミア	ウル	?	インダス文字×4	A類	不明	Grave 489 (幼児葬)	c.2350B.C.: サルゴン期	銅	23×23×?	Parpola 1994a: No.21	--
	テロー	なし	インダス文字×2	A類	不明	Gudea or Larsa levels	c.2200-2000B.C.: グデア~ラルサ期	凍石	長方形	Parpola 1994a: No.23	--
	キシユ	卍×1	なし	--	不明	不明	不明	凍石	不明	Mackay 1931a: 465	--
ベルシヤ湾岸	ファイラカ島	なし	(両面)各面イン ダス文字×3	B類	なし	Tell F6, Trench FH3, Level 4	前2千年紀前半	凍石	18×12×6	Parpola 1994a: No.13	--

は逆で彫が浅く稚拙。また鈕に沈線がなく穿孔が縦方向などインダスと異なる特徴が目立つ。最大の特徴である上方の楔形文字に基づきサルゴン期（前 2350 年頃）以前とされる（Gadd 1932: 193; Wheeler 1979: 117）。ただしそれはシュメール語、アッカド語のいずれの場合で読んでも意味をなさず（Gadd 1932: 193-194; Parpola et al. 1977: 156）¹²⁾、インダス語の可能性さえある。所有者はインダス文明出身の帰化人の可能性もあろうか。

インダス型印章である可能性が高いその他の方形印章

インダス型印章と報告されるも写真・図の報告がないため、本稿では以下に列記するにとどめる。

1. メソポタミア地方南部（表 4）

ウル：サルゴン期の 489 号墓の幼児葬から銅製ピンに附着して発見された銅製印章。図柄の有無は不明。4つのインダス文字は A 類（Parpola 1994a: No.21）。ラピス・ラズリ製印章を伴う。インダス文明では印章の副葬例はない。幼児への副葬という点が注意を引く。

テロー：インダス文字を 2 文字のみ記した長方形印章。グデア～イシン・ラルサ期の土層から発見。文字の配列は A 類という（Parpola 1994a: No.23）。

キシユ：卍文の方形印章（Mackay 1931a: 465）。帰属時期は不明であるが、当地にも卍文をシンボルとする集団がいた証となる。

2. ペルシャ湾岸（表 4）

ファイラカ島の小神殿で知られるテル・サアド F6 から出土。ペルシャ湾岸から発見された唯一の（長）方形印章。前 2 千年紀前半頃。両面ともにインダス文字のみが記される。配列は B 類（Parpola 1994a: No.13）。

3. まとめ

一部幼児葬を含むサルゴン期からイシン・ラルサ期（前 2300～1800 年頃）のメソポタミア地方で出土。またペルシャ湾岸唯一の例は前 2 千年紀前半の出土。各印章の正確な帰属は不明であるが、インダス文明と関連する商人の存在の証左といえる。

インダス文明と共通する図柄のペルシャ湾型印章

メソポタミアからインダスにかけて広く出土する円形印章のうち、インダス型印章と共通する動物の図柄やインダス文字を記した例について以下の類別を試みた。

A 類 = 上半部にインダス文字、下半部に通常 1 頭の動物を記す。インダス型印章をそのまま写し取ったような図柄・構図。下半部の動物を以下のよ

うに類別した。

- 1 類 = 供物柱を伴う一角獣
- 2 類 = （秣桶に頭を垂れた）短角のウシ
- 3 類 = 交尾する 2 頭の短角のウシ
- 4 類 = 短角のウシとトリ
- 5 類 = 座る四足動物
- 6 類 = レイヨウ
- 7 類 = （秣桶を伴う）トリ

B 類 = 上半部にインダス文字、その両端にサソリと「人の足跡」を併記。下半部に短角のウシ。

C 類 = 上半部にサソリと「人の足跡」、下半部に「短角のウシ」。

D 類 = 上下に背中合わせに記した 2 頭の動物。隙間にインダス文字。

- 1 類 = 2 頭の短角のウシ
- 2 類 = 「短角のウシ」とレイヨウ

E 類 = 円周上に 3 頭の動物を配する。隙間に他の図柄を伴う場合がある。

- 1 類 = 3 頭の短角のウシ
- 2 類 = 短角のウシ、座る短角のウシ、レイヨウ、樹木。中央にトリ。
- 3 類 = 短角のウシ、レイヨウ、サソリ、文字（?）。中央に「人の足跡」。

F 類 = 放射状に配した 6 つの動物の頭。インダス文字（1 字）。

G 類 = インダス文字のみ。

1. インダス文明版図内（図 8、表 5）

モヘンジョ・ダロ（図 8-1～3、5）とチャヌフ・ダロ（Chanhu-daro）（図 8-4）出土（Joshi and Parpola 1991; Shah and Parpola 1991）。インダス文字の配列はすべて A 類でインダス語であるという¹³⁾。裏面の鈕もすべてインダス型。その精巧な作りは、インダス型印章を製作した同じ職人が、これらのペルシャ湾型印章を製作したことを想像させる。

図 8-1、2：いずれも A 2 類。それぞれ前 2600～2200 年頃と前 2200～1800 年頃。インダス型印章にも多い秣桶を伴う短角のウシ（小磯 2002: 397）。図 8-2 は頸から肩にかけての鬃、臀部や性器、蹄や尾の先など丁寧な表現が特徴。その手法はインダス型印章と変わらない。

図 8-3：A 1 類。一部残る首の形から一角獣と思われる。前 2200～1800 年。

図 8-4：A 1 類。チャヌフ・ダロ出土。供物柱を伴う一角獣。前 2200～1800 年頃。

図 8-5：G 類。一角獣、有角のトラ（?）、レイヨウなど 6 頭の動物の頭部を放射状に配したインダス文明には

表5 ペルシヤ湾型印章

地方	出土地	図柄	図柄の種類	文字 (現状で確認できる数)	インダス文字 の種類 (Parpola 1994)	組	出土地点・状況	時期	材質	直径×高さ (包含寸)mm	参考文献	図
インダス	モヘンジョ・ダロ	短角のウシ、耕桶	A2	インダス文字×3	A類	インダス型	DKK(between Bis.1 & 7 (基準高下4.5m))	Intermediate: c.2600-2200BC. Late: c.2200-1800BC.	凍石	28×6	Mackay 1938: 343, 385, PLXCVI:500; Joshi and Parpola 1987: M.415; Sharma 2000: 54	図8-1
	モヘンジョ・ダロ	短角のウシ、耕桶	A2	インダス文字×6	A類	インダス型	HK区 (表土F1.2m)	Late: c.2200-1800BC.	凍石	22×?	Marshall 1931: PICX:309; Mackay 1931b: 375-376, 404; Joshi and Parpola 1987: M.416; Sharma 2000: 47	図8-2
	モヘンジョ・ダロ	一角獣? (破損)	A1	インダス文字×(6)	A類	インダス型	VS区 (表土F1.5m)	Late: c.2200-1800BC.	凍石	32×19	Marshall 1931: PICXIV:478; Mackay 1931b: 375-6, 405; Shah and Parpola 1991: 179 (M.1369)	図8-3
	モヘンジョ・ダロ	動物の頭×6 (放射状)	G	インダス文字×(1)	--	インダス型	DKK(Trench E)(表土F0.91m)	Late: c.2200-1800BC.	凍石	32×18	Marshall 1931: PICXIII:825; Mackay 1931b: 375-6, 404; Joshi and Parpola 1987: M.417; Sharma 2000: 44	図8-5
	チャヌワ・ダロ	一角獣、供物柱	A1	インダス文字×6	A類	インダス型	Mound II, Room 122, 154	II期: c.2200-1800BC.	凍石	31×12	Mackay 1930: 292, PLI:23; Joshi and Parpola 1987: C32	図8-4
	ウル	短角のウシ	A2	インダス文字×5-6	C類	インダス型	PG/1847号墓壁穴覆土層	c.2370-2000BC.; アッカド期~ ウル第三王朝	凍石	26×15	Parpola 1994a: No.18; Gadd 1932: No.16; Mitchell 1986: No.3; Potts 1992: 162; NHK他 2000: No.724	図9-1
	ウル	短角のウシ (一部破損)	A2	インダス文字×5	C類	インダス型	不明	アッカド期以降?	凍石	25×15	Parpola 1994a: No.14; Gadd 1932: No.2; Mitchell 1986: No.1; Potts 1992: 162; NHK他 2000: No.725	図9-2
	ウル	短角のウシ、[人の足跡]、 サソリ	B	インダス文字×2-3	D類	インダス型	PG/401号墓	アッカド期以降?	凍石	23×16	Parpola 1994a: No.19; Gadd 1932: No.15; Mitchell 1986: No.6	図9-12
	ウル	不明 (破損)	A2	インダス文字×(1)	D類	インダス型	Dingidqab地区	古バビロニア期を中心とする時代の 遺物混在	凍石	25×12	Parpola 1994a: No.17; Gadd 1932: No.5; Mitchell 1986: No.3; Potts 1992: 162	図9-7
	ウル	不明 (破損)	A	インダス文字×(4-5)	C類	インダス型	不明	アッカド期以降?	凍石	26×(12)	Parpola 1994a: No.15; Gadd 1932: No.3; Mitchell 1986: No.4; Potts 1992: 162; NHK他 2000: No.726	図9-10
	ウル	不明 (破損)	A	インダス文字×(2)	D類	インダス型	不明	アッカド期以降?	凍石	21(長さ)×13	Parpola 1994a: No.16; Gadd 1932: No.4; Mitchell 1986: No.3; Potts 1992: 162; NHK他 2000: No.727	図9-11
	メソポタミア	テロー	短角のウシ、耕桶	A2	インダス文字×5-6	B類	インダス型	不明	アッカド期以降?	緑灰色の石	13×4	Parpola 1994a: No.22
バビロン?		短角のウシ、耕桶	A2	インダス文字×5	C類	破損	不明	アッカド期以降?	凍石	不明	Parpola 1994a: No.34; Gadd 1932: No.17; Potts 1992: 162	図9-4
バビロン近郊?		交差する2頭のウシ	A3	インダス文字×4-5	C類	インダス型	不明	アッカド期以降?	凍石	32×19	Parpola 1994a: No.35; 1994b: 219; Gadd 1932: No.18; Naveem 1992: 271; Potts 1992: 162	図9-8
不明		短角のウシ、耕桶	A2	インダス文字×7	D類	インダス型	不明	アッカド期以降?	凍石	不明	Parpola 1994a: No.36; Langton 1932	図9-5
不明		短角のウシ	A2	インダス文字×6	C類	インダス型	不明	アッカド期以降?	凍石	23×13	Parpola 1994a: No.38; Ward 1910; Buchanan 1979;	図9-6
不明		トリ、耕桶	A7	インダス文字×5	D類	不明	不明	アッカド期以降?	凍石	22×11	Parpola 1994a: No.41; Buchanan 1979: No.1089	図9-9
スーサ		短角のウシ	A2	インダス文字×7	B類	インダス型	不明	アッカド期以降?	蛇紋岩	22×12	Parpola 1994a: No.30; Amiet 1988: No.A6	図10-1
ルリスターン地方		短角のウシ	A2	インダス文字×4	B類	インダス型	不明	アッカド期以降?	凍石	26×13.5	Parpola 1994a: No.31; Brunschwig et al. 1983: Fig.3	図10-2
カカート・アル・ ハハレーン		短角のウシ	A2	インダス文字×5	C類	インダス型	Excavation 520, Trench D level 19	c.2650-2000BC.; IIa期	凍石	28.5×15	Parpola 1994a: No.5; Kjaerum 1994: Fig.1725	図11-1
カカート・アル・ ハハレーン		鹿るレイヨウ? (破損)	A5	インダス文字×(1-2)	D類	インダス型	Excavation 520, Trench 1959 level 15	c.2650-2000BC.; IIa期	凍石	27×14	Parpola 1994a: No.6; Kjaerum 1994: Fig.1726	図11-4
カカート・アル・ ハハレーン		ヨウレイ	A6	インダス文字×1	--	円盤状	Excavation 520, Trench A level 20	c.2650-2000BC.; IIa期	凍石	25×17	Kjaerum 1994: Fig.1727	図11-5
ハマト・タウン		短角のウシ、足型、サソリ	C	なし	--	インダス型	イスラーム時代の発掘	c.2650-1900BC.; IIa-c期	凍石	28×16	Bibby 1958: Seal III; Kjaerum 1994: Fig.1731	図11-7
ハマト・タウン	短角のウシ、クジャク?	A4	インダス文字×4	B類	インダス型	area BS-2, Burial Mound 1737 石室内	c.2200-2000BC.	凍石	27×14.5	Parpola 1994a: No.7; Shrivastava 1991: 25-26, Fig.55A; Al-Sindi 1999: No.180	図11-3	
ハマト・タウン	短角のウシ×2	D1	インダス文字×2	--	インダス型	不明	c.2650-1900BC.?	凍石	25×14	Al-Sindi 1999: No.160	図11-8	
ハマト・タウン	短角のウシ、レイヨウ	D2	インダス文字×3	--	インダス型	不明	c.2650-1900BC.?	凍石	26.5×14	Al-Sindi 1999: No.159	図11-9	
ハマト・タウン	短角のウシ×2、レイヨウ、 トリ、樹木、三日月?	E2	なし	--	インダス型	不明	c.2650-1900BC.?	凍石	27.5×14.5	Al-Sindi 1999: No.65	図11-11	
サール	短角のウシ (破損)	A?	インダス文字×(1)	--	インダス型	不明	c.2650-1900BC.?	凍石	22.5×12.5	Al-Sindi 1999: No.181	図11-6	
サール	なし	G	インダス文字×5-6	B類	不明	不明	c.2650-1900BC.?	凍石	27×14	Parpola 1994a: No.8; Al-Sindi 1999: No.182	図11-13	
ハハレーン島内 (出土地不明)	短角のウシ×3	E1	なし	--	ディルムン型	不明	c.2650-1900BC.?	不明	不明	不明	During Caspers 1979: 65; Brunschwig et al. 1983: Pl.III Fig.10	図11-10
ハハレーン島内 (出土地不明)	短角のウシ	A2	インダス文字×2	--	不明	不明	c.2650-1900BC.?	不明	不明	不明	Naveem 1992: 272, 275	図11-2
ハハレーン島内 (出土地不明)	短角のウシ、レイヨウ、 サソリ?、[人の足跡]	E3	インダス文字×1?	--	不明	不明	c.2650-1900BC.?	不明	不明	不明	Naveem 1992: 272, 276	図11-12
フレイラカ高 テル・サアト	短角のウシ (一部破損)	A2	インダス文字×5-8	C類	ディルムン型	Tell F3 排土	c.2650-1901BC.?	凍石	33×15	Parpola 1994a: No.12; Kjaerum 1983: No.279	図12-1	
フレイラカ高 テル・サアト	ウシ? (臀部のみ残存)	A	インダス文字×4	D類	リング状	Tell F3, Trench D, Square HS-4覆土	バールバル後期-カッシート期	凍石	19×8	Parpola 1994a: No.11; Kjaerum 1983: No.319	図12-2	

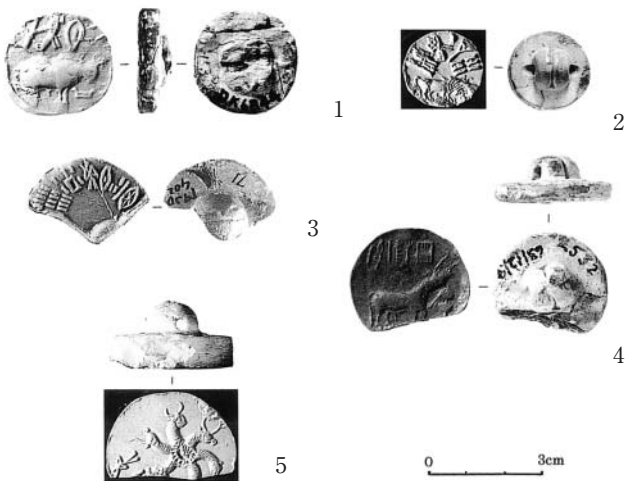


図8 ペルシャ湾型印章：インダス文明版図内出土
(S = 1/2)

1～3, 5 モヘンジョ・ダロ (Joshi and Parpola 1987; Shah and Parpola 1991)
4 チャヌフ・ダロ (Joshi and Parpola 1987) 印面はすべて粘土に押捺したもの。

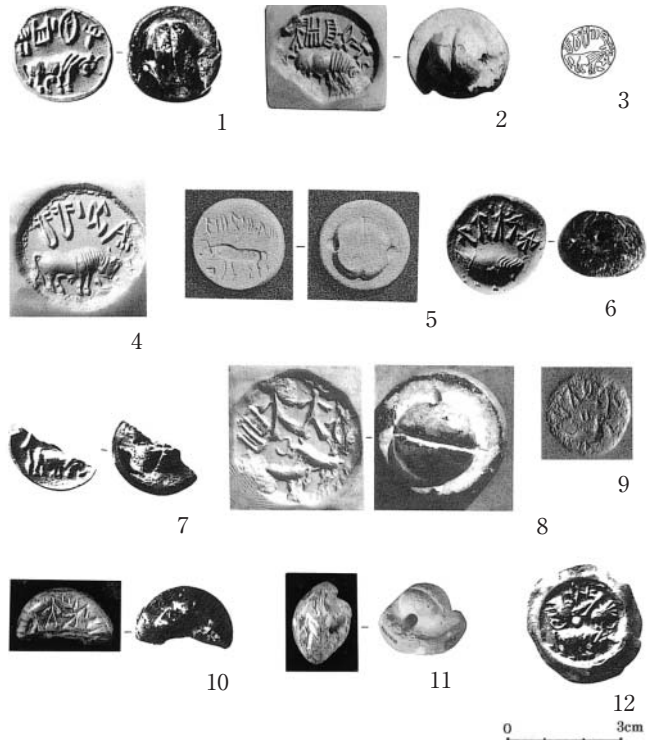


図9 ペルシャ湾型印章：メソポタミア地方出土
(S = 1/2 ただし4, 5は縮尺不同)

1, 2, 7, 10～12 ウル (During-Caspers 1998; Mitchell 1986; Gadd 1932; NHK 他 2000)
3 テロー (Collon 1996)
4 バビロン? (Parpola 1994b)
5, 6, 9 メソポタミア地方 (Langdon 1932; Buchanan 1979)
8 バビロン近郊? (Gadd 1932) 5, 10, 11を除き印面は粘土に押捺したもの。



図10 ペルシャ湾型印章：エラム地方、ルリスターン地方出土 (S = 1/2)

1 スーサ (Amiet 1988)
2 ルリスターン地方 (Brunswick et al. 1983) 印面は粘土に押捺したもの。

類例のない図柄が特徴¹⁴⁾。前 2200～1800 年頃。

2. メソポタミア地方南部 (図9、表5)

出土地が不明なものを含め 12 点。鈕はほとんどインダス型。インダス文字は図9-3を除き C、D 類で (Parpola 1994a; 表5)、シュメール語など当地の言語の可能性が高い。年代がある程度把握できるのは以下の2点。図9-1はウル第3王朝期の PG/1847 墓の竪穴孔の覆土出土であるが、伴出した遺物からアッカド期-ウル第3王朝 (前 2300～2000 年頃) とされる。また図9-12はサルゴン王期の PG/401 号墓からの発見。金製耳飾りや凍石、ラピス・ラズリ、紅玉髓などのビーズが伴出 (Gadd 1932: 201)。他もおおよそ同時期であろう。

図9-1～7：A 2類。上半部にインダス文字、下半部に短角のウシ。(1)は秣桶を省略。とくに (図9-2、4)は細工が細かい。製作者はインダス型印章と同じか、少なくともその技法を熟知していたであろう。製作地の同定には、原材料の凍石の種類の特定が課題となる。

図9-8：A 3類。交尾する2頭の短角のウシはインダス型印章に類例がない。細工が稚拙で熟達した職人の仕事ではない。

図9-9：A 7類。秣桶を伴うトリの図柄。インダス型印章には類例がない。

図9-10, 11：A 類であろう。下半部が破損しており図柄は不明。

図9-12：B 類。サルゴン期とされる PG/401 号墓出土。上半部はインダス文字とその両端にインダスに類例が

ないサソリと「人の足跡」(Porada 1971)、下半部に秣桶を省略した短角のウシを記す。

3. エラム地方・ルリスターン地方 (図3、図10、表5)

スーサ (図3、図10-1)、ルリスターン地方 (図10-2)とも秣桶を省略した短角のウシ。とくに前者はウシの表現が稚拙。鈕はインダス型。インダス文字は B 類 (Parpola 1994a: No.30, No.31.)。アッカド期頃以降であ

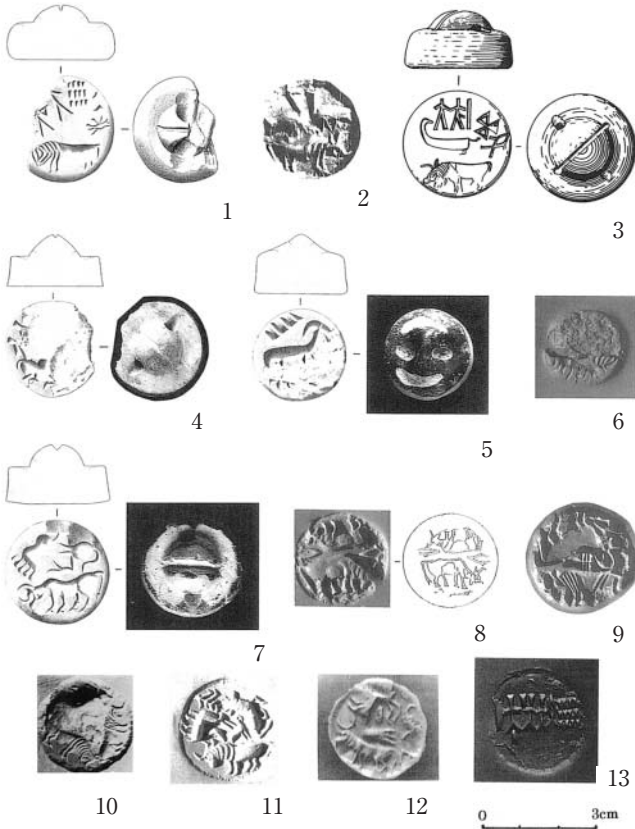


図11 ペルシャ湾型印章：ペルシャ湾岸・バハレーン島出土 (S = 1/2 ただし10は縮尺不同)

- 1, 4, 5, 7 カラート・アル・バハレーン (Kjærnum 1994)
- 3, 8, 9, 11 ハマド・タウン (Srivastava 1991; Al-Sindi 1999)
- 6, 13 サール (Al-Sindi 1999)
- 2, 10, 12 バハレーン島内 (Brunswick et al. 1983; Nayeem 1992)
- 2, 6, 8, 9, 10 ~ 13の印面は粘土に押捺したもの。

ろうか。

4. ペルシャ湾岸 (図4、図11、図12、表5)

バハレーン島から11点、ファイラカ島から2点が出土。短角のウシと他の動物とが併記され配置も多様化する。前2200年頃以降が多く全体的にメソポタミアの出土例よりも新しい。

バハレーン島：島の各地から出土。裏面の鈕は円錐状の図11-5¹⁵⁾とデイルムン型の図11-10を除きインダス型。ただし縦ないし斜め方向の穿孔が特徴。文字配列はB、C、D類 (表5)。当地での初現はカラート・アル・バハレーン520地区出土の図11-1に伴出した粘土板文書¹⁶⁾に基づき、前2050~2000年頃 (II a期) とされた (図11-1、4、5、7) (Brunswick et al. 1983; Højlund 1989, 1994: 463; Kjærnum 1994: 341; 近藤 2001)。一方当地唯一の墓出土例となるハマド・タウン (Hamad Town) の墳墓石室出土の図11-3は、文字配列のインダス文明

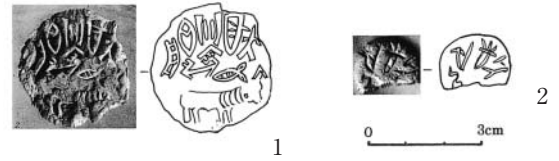


図12 ペルシャ湾型印章：ペルシャ湾岸・ファイラカ島出土 (S = 1/2)

- 1, 2 テル・サアド (During-Caspers 1998; Collon 1996)
- いずれも印面は粘土に押捺したもの。

との比較から前2200~2000年頃という (Srivastava 1991: 26; 1997)¹⁷⁾。年代についてはさらに検討が必要であろう。

図11-1、2：A2類。インダスと同じ短角のウシ。しかし体躯は華奢で簡略化が顕著。

図11-3：A4類。破損で不明瞭ながら短角のウシの上方にクジャクが記されているという (Srivastava 1991: 25~26)。

図11-4：A5類。破損しているが座る四足の動物が確認できる。座る動物はモヘンジョ・ダロの大理石製印章の上下背中合わせの2頭のレイヨウが唯一の例である¹⁸⁾。

図11-5：A6類。簡略化したレイヨウ。また裏面の鈕が円錐状と特殊。レイヨウ左上の櫛状の記号がインダス文字である可能性があるため取上げた。

図11-6：A?類。上半部破損。下半部短角のウシ。

図11-7：C類。メソポタミア地方出土の (図9-12) に酷似するが、本例ではインダス文字を欠き、簡略化した短角のウシ、サソリ、「人の足跡」のみ。

図11-8：D1類。上下背中合わせの2頭の短角のウシ。

図11-9：D2類。上下背中合わせに短角のウシとレイヨウ (ヤギ?)。

図11-10~12：E1類、E2類、E3類。円形の縁辺に沿って短角のウシ、レイヨウ、サソリなどを、中央にトリや「人の足跡」を配す。インダス文明に類例なし。

図11-13：G類。大きく記したインダス文字のみ。上記の図柄の多様化は、前2100年頃にバハレーンが東西交易の中核となるプロセスと重なる。さらなる多様化の結果、デイルムン型印章が成立すると思われる。同時に短角のウシは姿を消す (Kjærnum 1994)。本家インダス文明への帰属意識の消失を示唆するのではなかろうか¹⁹⁾。

ファイラカ島：テル・サアドF3から発見された2例がある (表5)。

図12-1：A2類。短角のウシとインダス文字との間にはサカナと矢印状の記号があるが不明瞭。鈕はデイルムン型。文字配列はC類 (Brunswick et al. 1983: 103; Parpola 1994a: No.11)。排土発見であるがバハレーン出土

例と同時期であろう。

図 12 - 2 : A 類。下半部が破損し動物は不明。鈕は沈線のあるリング状 (?) という (Parpola 1994a: No.11)。後期パールパール期の建物を覆うカッシート期の堆積層から発見されたが (Brunswig et al. 1983: 103)、実年代は前 2000 年頃まで遡るであろう。文字は D 類 (Parpola 1994a: No.11)。

5. まとめ

ペルシャ湾型印章について次のように総括できる。

- (1) 時期：メソポタミア地方南部ではアッカド期からウル第 3 王朝期に集中し、図柄は短角のウシとインダス文字が主体。細工が精巧なものほど古いと思われる。アッカド期頃のインダスとメソポタミア両文明の直接的な交流を想定せざるをえない。一方バハレーンでは伴出した文書資料から前 2050 年以降とされる。図柄はより多様で印章ごとに異なる。文字は稀。鈕は縦方向の穿孔が多い。両地方の違いは型式学的にも時期差と考えられ、メソポタミア出土例の主体を「前期ペルシャ湾型」、バハレーン出土例を「後期ペルシャ湾型」とできる。つまり印章を用いる集団の移住があったことを想定させる。ただしこれらの印章の起源をバハレーンの貝製印章に求める見方もあり (Al-Sindi 1999)、検討を要する。

ペルシャ湾沿岸のその他の遺跡やオマーン湾岸からの発見例がない点が疑問であるが、かならず発見されるであろう。

- (2) インダス文明：前期ペルシャ湾型のみ。図柄は「短角のウシ」に限定されない。商人は少数であったろう。文字はいずれもインダス語。
- (3) メソポタミア地方南部：前期ペルシャ湾型主体で、図柄の 8 割は「秣桶に頭を垂れた短角のウシ」。これらの印章の所有者がインダス文明の短角のウシをシンボルとする集団から派生・分家したと推測できる。一方交尾する 2 頭の短角のウシや秣桶を伴うトリ、サソリ、「人の足跡」はインダスに類例がなく独自性・地域性が強い。当地への帰化・土着化の高まりを示唆する。文字も当地の言語の可能性が高い。ウル第 3 王朝期頃か。またとくに前期型印章の製作者はインダス型印章と同じ人物の可能性もある。製作地が検討課題となろう。
- (4) エラム地方・ルリスターン地方：前期ペルシャ湾型。図柄は秣桶が省略された短角のウシ。文字はインダス語の可能性。商人の活動域の広さを裏づける。
- (5) バハレーン：後期ペルシャ湾型主体。やはり 8 割が秣桶と性器が省略された短角のウシ。ただし単一の

固定化された構図ではなく、ウシが複数であったり他の動物の併記など印章ごとに異なる。文字の省略も多い。その傾向はその後ファイラカ島を拠点とするデイルムン型印章へと受け継がれる。本家インダス文明への帰属意識の弱まりを示す。

- (6) ファイラカ島では短角のウシとインダス文字を記しながら、鈕がデイルムン型の印章がある。デイルムン型への過渡期であろう。

インダス文明と共通する図柄の円筒形印章

メソポタミア地方南部やイラン高原シスターン地方、さらにはインダス文明内からも出土する。印面が広く、複数の動物や樹木など動きのある場面が表現される。以下の分類を試みた。

形態の類別

- I 類 = 円筒形印章。上下面が平坦な円筒形で側面を印面とする。軸方向に穿孔、あるいは上下面に刺突か図柄・文字を記す場合がある。上下面の文字はスタンプ型印章として用いた可能性もあろう。
- II 類 = 円筒形印章で、上端に穿孔のある鈕をもつ。円筒側面と下面に図柄・文字を記しスタンプ型印章の機能も合わせ持つと考えられる。

図柄の類別

- A 類：上半部に複数のインダス文字、下半部に動物を記しインダス型印章のコピーといえる構図。ただし動物は 2 頭。
- B 類：動物・樹木・人物などを記す。隙間にインダス文字を 1、2 文字記す場合がある。
 - B 1 類 - 動物のみ。インダスと共通する動物ほか数頭。
 - B 2 類 - 動物と樹木のみ。サカナをモチーフにしたインダス文字を 1 文字記す場合がある。
 - B 3 類 - 動物と樹木と人物。人物には「動物の下半身が合体した有角の人物」を含む。
 - B 4 類 - 上下 2 段に区画された印面に動物・樹木・人物（「角神」を含む）を記す。
- C 類：インダス文字のみを記す。
 - C 1 類 - 複数の文字を印面に水平に記す。
 - C 2 類 - 複数の文字を印面に縦方向に記す。
- D 類：斜格子文のみを記す。

1. メソポタミア地方南部 (図 13 - 1 ~ 5、表 6)

ウルのほか内陸 500km のテル・スレイマー (Tell Suleimeh) など広域から計 5 点発見された (一部出土地不明)。一角獣、コブウシ、ゾウ、サイ、ワニ、短角のウ

表6 円筒形印章

地方	出土地	図柄	分類	文字	インダス文字の 種類 (Parpola 1994)	軸方向の孔	出土地点・状況	時期	材質	高さ×直径 mm	参考文献	図	
メンボタミア	ウル	一角獣、サカナ、三つ葉?、木	FB2	インダス文字×1	D類	不明	王塚地区(PC) loose soil	初期王朝期? c.2000-1800BC	貝	17×9	Parpola 1994a: No.20, 1994b: 181; Gadd 1932: No.7; Mitchell 1986: No.8; コロン 1996: No.612	図133	
	ウル	コウウシ、サソリ、ヘビ×2、飛ぶ人、木、まぐさ? (上下端に刻み目)	FB3	なし	--	有	ウル第三王朝期の墓を掘り込んだラル中央部の墓穴壁	c.2000-1800BC	凍石	25×16	Gadd 1932: No.6; Mitchell 1986: No.17; コロン 1996: No.611; NHK他 2000: No.719	図134	
	テル・アスマル	ゾウ、サイ、ワニ (インドガビアル) 上下端に沈線	FB1	なし	--	不明	IVa: Locus F19 築屋内	後期アッカド期	凍石	34×?	Frankfort 1963: 306; Mackay 1938: 345; During-Caspers 1982: Pl. 1-4; Parpola 1994a: 314; コロン 1996: No.610	図131	
	テル・スレイマー2	一角獣、短角のウシ、トリ、サカナ	FB1	なし	--	不明	IVbR12	アッカド期	石膏	26×16	Parpola 1994a: 314; 1994b: 181; コロン 1996: No.609	図132	
	不明	台座に座る有角の人物(1角神)、有角のヘビ×2、スイキエウ×2、杖(杖)、木×3、2頭のトラと格闘する人、マルコールヤギ、ハガタカ?、サイ	FB4	インダス文字×2	--	不明	不明	不明	不明	メノウ	36×20	Parpola 1994a: No.38; Corbani 1936; コロン 1996: No.614	図135
	エラム	短角のウシ×2、まぐる桶 (上下端に沈線)	EA	インダス文字×8	B類	不明	不明	アッカド期以降?	凍石	23×16	Parpola 1994a: No.29; Amiet 1988: No.A5; コロン 1996: No.608	図136	
	シスターン	不明 (破損)	I or II	インダス文字×6、 下面: ×1? (縦横沈文)	C類	なし	不明	前3千年紀後半~ 前2千年紀初頭	凍石	(19)×14	Knox 1994; During Caspers 1998: 53-54	図137	
	ハローチスターン	スイアリ・ダンブ	コウウシ、ライオン、下面にサソリ?	II-B1	--	--	なし	不明	前1900年頃?	凍石	26×13	Musee National 1988: No.139; Shah and Parpola 1991: No.Sb.3	図14-1
		スイアリ・ダンブ	コウウシを襲うライオン、ワニ、人物、樹木	II-B3	下面に2文字?	--	なし	不明	前1900年頃?	凍石?	26×17	Shah and Parpola 1991: No.Sb.2	図14-2
	インダス	モハンジョ・ダロ	不明 (破損)	EA?	インダス文字×2	--	有	DK区B1.1, House VIII, Room63	Intermediate: c.2600-2200BC	凍石	(20)×20?	Mackay 1938: 385; PLXCVI:509; Shah and Parpola 1991: M.1370	図15-1
モハンジョ・ダロ		ヨウレイ×2、サカナを啜えたヘビ、トリ×2、木	FB1	なし	--	有	DK区B1.4, Room12	Intermediate: c.2600-2200BC	凍石	25×15	Mackay 1938: 7, 344-5, 384; PLXCVI:488; Joshi and Parpola 1987: 102M-418; コロン 1996: No.607	図15-2	
モハンジョ・ダロ		ヤギ/ヨウレイ?×2、サソリ/昆虫? (上下端に沈線)	FB1	インダス文字×1	--	不明	DK区B1.3, House V1, Room32	Intermediate: c.2600-2200BC	方解石	22×13	Mackay 1938: 7, 344, 381; PLXXXIX:376; コロン 1996: No.606	図15-3	
モハンジョ・ダロ		斜格字文、卍・レイヨウ (上下面)	FD	なし	--	なし	DK区B1.25, House,, Room1	Late: c.2200-1800BC	ファイアン ス	42×14	Mackay 1938: 344, 372; PLXXXIV:78; Joshi and Parpola 1987: M.419	図15-8	
カーリー・ハンガン		有角の人間とトラの下半身の合体生物、女の両側から箱を抬げ合う男×2	FB3	なし	--	有	不明	II期: c.2600-1800BC	不明	20×11	Joshi and Parpola 1987: K.68; コロン 1996: No.605	図15-4	
ハラッパ		なし	IC1	インダス文字×4	A類	有	Mound F, 地表下2.4m	Intermediate-Late: c.2200BC	凍石	5×9	Vats 1940: 327, 347; PLXCV-409; Joshi and Parpola 1987: H.368	図15-5	
ハラッパ		なし	IC1	インダス文字×7、上面に×1	A類	なし (一端に 脚突)	Mound AB, 地表下2.4m	Intermediate-Late: c.2200BC	凍石	7×9	Vats 1940: 327, 347; PLXCV-409a; Joshi and Parpola 1987: H.369	図15-6	
ハラッパ		なし	IC2	インダス文字×2	A類	なし (両端に 脚突)	Mound F, 地表下4.0m	Intermediate: c.2600-2200BC	凍石	30×10	Vats 1940: 327, 350; PLXCVII:561; Shah and Parpola 1991: H-1017	図15-7	

表7 プリズム形印章

地方	出土地	図柄	文字	インダス文字の 種類 (Parpola 1994)	出土地点・状況	時期	材質	幅×高 mm	参考文献	図
オマーン海岸	マイカル1	1.イス、ヤギ? 2.コウウシ、サソリ? 3.アイベックス、ヤギ	なし	--	House 4	c.2500-2000BC: ウナム・アン・ナール期	緑泥岩	31×17	Potts 1992: 110-112	図16-1
ベルシヤ海岸	アル・ハジャル	1.短角のウシ、サソリ 2.向かい合う2頭のヤギ? 3.インダス文字×3	インダス文字×3	A類	Grave 1979-1	c.2200-1900BC: 初期ティルムン期	凍石	27×13	Parpola 1994: No.9; Weisgerber 1984: Fig.24.7; During Caspers 1998: 55; Kjerum 1994: 340	図16-2
	バハレーン島内	1.短角のウシ 2.向かい合う2頭のヤギ? 3.インダス文字×3	インダス文字×3	A類	不明	c.2200-1900BC: 初期ティルムン期	石	不明	During Caspers 1998: 55; Vine 1993: 48	図16-3

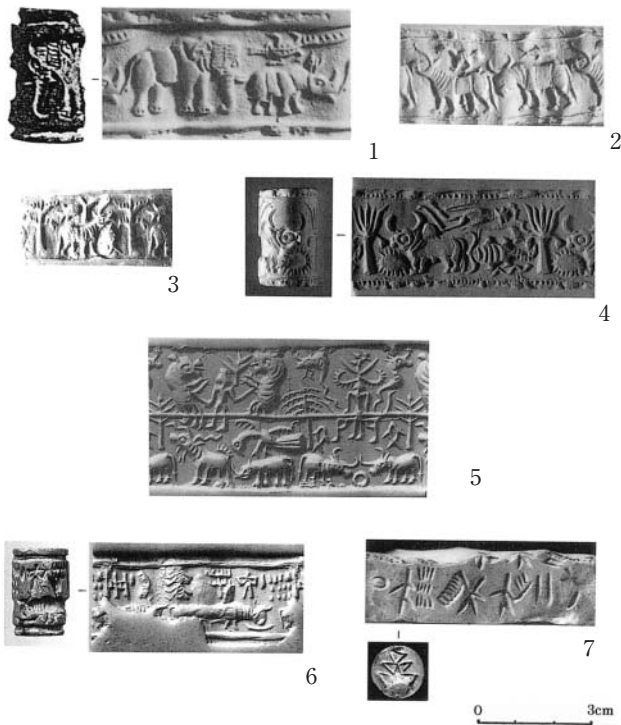


図13 円筒形印章：メソポタミア地方、エラム地方、シスターン地方出土 (S = 1/2)

- 1 テル・アスマル (During Caspers 1982; コロン 1996)
- 2 テル・スレイマー (コロン 1996)
- 3, 4 ウル (Parpola 1994b; NHK 他 2000)
- 5 メソポタミア地方 (Parpola 1994b)
- 6 スーサ (Amiet 1988)、7 シスターン地方 (Knox 1994)

シなどインダスと共通する動物や、インダスの護符（土製小板、タブレット）に登場するトリやヘビ、サカナ、サソリや樹木が記される。動物のポーズ、筋肉の表現などインダスと酷似。ただ画一的な短角のウシを繰り返すペルシャ湾型印章とは対称的に、複数の動物を記し図柄は印章ごとに異なる。文字もサカナがモチーフのインダス文字を1、2文字記すのみ²⁰⁾。

図13-1：I-B 1類。テル・アスマル (Tell Asmar) IV a層 F19：2地点の発見。アッカド後期（前2200年頃）(Parpola 1994a: 314; コロン 1996: No.610)。やや稚拙ながらゾウ、サイ、ワニを記す。円筒上下端部の沈線はキャップ状装飾の痕跡であろう。

図13-2：I-B 1類。テル・スレイマーIV層 R12発見、アッカド期 (Parpola 1994a: 314; コロン 1996: No.609)。供物柱を欠く一角獣、秣桶を欠く短角のウシ、さらにそれぞれの上方にトリとサカナを記す。

図13-3：I-B 2類。ウルの王墓 (PG) 地区の発見。王墓に伴うとすればインダスと関連する円筒形印章で最古の可能性もあるが、出土状況は不明 (Gadd 1932: No.7; Parpola 1994a: No.20)。一角獣の頭下と腰上にサカナ（文字?）、肩上に三つ葉、前方に樹木。

図13-4：I-B 3類。ウルのイシン・ラルサ期の堅穴墓出土 (Mitchell 1986: No.17)。コブウシ、サソリ、飛翔する(?)人物、ヘビ、ヤシの木(?)などがインダスとはやや異なる表現の手法で記される。コブウシの頭部を丸い大きな目で現すのはデイルムン型印章の特長であるが、パキスタン・バローチスターン丘陵のクッリ文化の影響も想起させる。サソリはインダス文明以前のバローチスターン丘陵やインダス平原で土器の文様に見られるが、文明期にはない。上下端に装飾取り付けの痕跡。

図13-5：I-B 4類。出土地不明。上半部に台座に座る有角の人物（「角神」）やヘビ、2頭のトラと格闘する人物。下半部にレイヨウ（ヤギ?）、サイ、トリ、「円（秣桶に代わるものか）」を挟んで向き合う2頭の頭を垂れたウシ、各種樹木 (Corbiau 1936)。ほとんどがインダスと共通するモチーフであるが、すべて同時に記す点が特徴。また「角神」はインダス文明の信仰対象で (永嶺 2000)、特別な印章であることを示唆する。

2. エラム地方 (図13-6、表6)

I-A類。スーサ出土。上半部に8つのインダス文字、下半部に2頭の短角のウシを記す。インダス型印章をコピーした図柄と構図の唯一の例。円筒に刻む難しさのためかウシの胴体は長い、性器や蹄などの細工は丁寧。文字配列はB類でインダス語の可能性は高い (Parpola 1994a: No. 29)。アッカド期頃であろうか。印面上下端部の沈線はキャップ状装飾の痕跡であろう。

3. シスターン地方 (図13-7、表6)

IないしII類のスタンプ型(?)円筒形印章。20世紀初頭のアフガニスタンのシスターン地方で発見と伝えられる (Knox 1994; During Caspers 1998)。上半部欠損、下半部に6つのインダス文字 (C類)、下面に鋸歯状に三角形を並べた記号 (文字?) を記す。下半部に文字を記す類例は稀で、以下で触れるバローチスターンやトルクメニスタンとの関連が窺え、また陸路の交易を裏づける。前2千年紀初頭頃か。

4. バローチスターン地方 (図14、表6)

上端に穿孔した鈕をもつスタンプ型円筒形印章がパキスタン西部バローチスターン丘陵の麓のスイブリ・ダンブ (Sibri Damb) から2点出土している。伴出する幾何学文の方形印章とともにトルクメニスタン地方のタイプ・テベ (Taip Tepe) などの「ムルガブ型印章」と比較される²¹⁾。前1900年頃か (Santoni 1984: 58; Musée National 1988: 120, No.139; Jarrige and Hassan 1989: 162)。末期のインダス文明で交易に従事した商人のものであろうか。



図14 円筒形印章：バローチスターン地方出土
(S = 1/2)

1, 2 スイプリ・ダンプ (Shah and Parpola 1991)
印面は粘土に押捺したもの。

図14-1：II-B 1類。磨耗のためか全体が丸みを帯び、図柄も不明瞭。側面に対峙するコブウシとライオン、下面にサソリ(?)を記す。ウシとライオンの組み合わせはイラン高原との(後藤 1999: 80)、コブウシにはインダスとの関連が窺える。

図14-2：II-B 3類。側面にコブウシを襲うライオン、ワニ(ウシ上方とライオンの下)、両腕を掲げる人物を記す。コブウシやワニにインダスの影響が窺える。また下面の記号は2文字のインダス文字の組み合わせか。

5. インダス文明版図内(図15、表6)

8点が出土している。動物の表現はメソポタミア出土例と酷似する。文字配列はいずれもA類でインダス語と考えられるという²²⁾。帰属時期の確定は難しいが、多くは文明期前半の前2600～2200年頃と考えられる。

図15-1：I-A?類。モヘンジョ・ダロ出土。上半部にインダス文字、下半部は欠損。

図15-2：I-B 1類。モヘンジョ・ダロ出土。2頭のレイヨウ(ヤギ?)、トリ、サカナを喰えたヘビ、木を記す。トリとヘビはインダス型印章には登場しない²³⁾。これらの印章への表記は西方からの出土例に限られる(図9-9、図11-3, 11、図13-2)。

図15-3：I-B1類。モヘンジョ・ダロ出土。サソリ(昆虫?)、2頭のレイヨウ(ヤギ)とインダス文字(樹木?)が記される。振り返る姿のレイヨウはもう1頭に対し垂直に配置される。前述の通りサソリは西方の印章にも登場する(図11-7、図13-4)。また上下端にキャップ状の装飾をかぶせた痕跡を残す。

図15-4：I-B 3類。カーリーバンガン出土。有角の人物にトラの下半身が合体した生物と、女性を挟んで互いに槍を投げ合う2人の男性を記す。半人半獣の図柄はインダス型印章に2点あるが(Joshi and Parpola 1987: M-311; K-50)、女性と槍を投げ合う男性は類例がない²⁴⁾。インダス文明版図外にも類例がなく(後藤 1999: 81)、イン



図15 円筒形印章：インダス文明版図内出土

1～3, 8 モヘンジョ・ダロ (Joshi and Parpola 1987; Shah and Parpola 1991; During-Caspers 1982; コロン 1996)

4 カーリーバンガン(Joshi and Parpola 1987)

5～7 ハラッパー (Joshi and Parpola 1987; Shah and Parpola 1991)

ダス固有の可能性も捨てきれない。

以下は印面の様子など印章の可能性は低い、形態の類似上触れておく。

図15-5：I-C 1類。高さ5mm、直径・高さともに9mmと小さく、インダス文字を通常の文字配列のまま刻んでいるため護符かもしれない。

図15-6：I-C 1類。図15-5と同形であるが上下面にインダス文字と刺突を施す。本例も通常の文字配列。

図15-7：I-C 2類。上下面の刺突は装飾などの取り付け用であろうか。側面に縦方向にインダス文字を記す。

図15-8：I-D類。側面に斜格子文、上下面に卍とレイヨウ(?)を記す。他に類例はないが、スタンプ型兼用の円筒形印章であろうか。

さらにモヘンジョ・ダロとハラッパーからは、製作途中の円筒形印章の可能性も指摘される貝製の円筒形の遺物が5点出土している(During Caspers 1982: 345-346)。

6. まとめ

- (1) 以上で触れた円筒形印章はI - B類（上下面平坦、ときに軸方向に穿孔、図柄は複数の動物・樹木・人物のみ）を主体とする。
- (2) ペルシャ湾岸やオマーン湾岸からの報告例はない。ただし今後発見される可能性は大きい。
- (3) メソポタミア地方の出土例は、およそサルゴン期以降となる。
- (4) インダス型印章をそのままコピーした図柄のスーサの例を初め、シスターン、パローチスターン各地方からの円筒形印章の発見は、イラン高原やトルクメニスタン方面との交易活動の一端を物語る。
- (5) 円筒形印章はメソポタミア固有のものであるため、所有者の出身・出自も同地方であった可能性が高い。図柄の複数の動物は、所有者がインダス文明などの各商人集団と専属で結んだ交易関係、提携、統合・結束、婚姻関係を表すのではなかろうか。
- (6) 印章の製作者はインダス型印章と同じか、直接触れていたであろう²⁵⁾。

プリズム形印章

オマーン内陸とバハレーンから発見されたやや細長い3面のプリズム形の印章3点で、インダス型印章とも関連する動物の図柄やインダス文字を記す。その起源には諸説あるが (Potts 1992: 110-113)、工房址がカラート・アル・バハレーン I b ~ II 期 (前 2100 ~ 1900 年頃) で発見され、バハレーンが中心であったと考えられる (Kjærnum 1994: 339-340)。

1. オマーン湾岸 (図 16 - 1、表 7)

マイサル - 1 (Maysar 1) の第 4 号住居から出土。前 2500 ~ 2000 年頃のウム・アン・ナール文化 (Umm an-Nar) の所産とされ (後藤 2000)、各面にイヌとヤギ、コブウシとサソリ (?), レイヨウとヤギ (?) を記す。表現の手法は当地固有である (後藤 1997: 68-69)。当地からは鉛製や紅玉髓製の円形印章なども出土し (Potts 1992: 110-111; Vogt 1996: 117; Cleuziou 2002: 224)、周辺の銅の採掘址や墓を含め (Weisgerber 1983)、メソポタミア文明が「マガン (マカン)」と呼んだ当地の交易活動を裏づける。

2. ペルシャ湾岸 (図 16 - 2・3、表 7)

図 16 - 2 : アル・ハジャル (al-Hajjar) の 1979 - 1 号墓出土。「初期ディルムン期」(Vine 1993: 48) の前半、前 2200 ~ 1900 年頃の所産であろうか。各面にインダス文字、短角のウシとサソリ、向き合う 2 頭のヤギもしくはレイヨ



図 16 プリズム形印章：オマーン湾岸、ペルシャ湾岸出土 (1 : S = 1/2 2、3 は縮尺不同)

- 1 マイサル (Potts 1992)
- 2 アル・ハジャル (During Caspers 1998)
- 3 バハレーン島内 (During Caspers 1998)

ウを記し、文字は A 類という (Parpola 1994a: No.9; During Caspers 1998: 46, 55)。

図 16 - 3 : 出土地不明。アル・ハジャルの例と酷似し、3 面にはそれぞれインダス文字、短角のウシ、向き合う 2 頭の動物を記す (During-Caspers 1998: 46, 55)。

ペルシャ湾型印章と同様にここでも短角のウシが登場し、インダス文字とともにインダスと共通する要素として重要。マイサルとバハレーンの例が時期差か地域差かも不詳であるが、互いに大きな時期的な隔たりはないであろう。

結語

前 3 千年紀後半を中心に、インダス文明の版図外から発見されたインダス型印章とこれと共通する図柄やインダス文字を記した各種印章の比較検証を行った。その結果これらは多種多様で、すなわち所有者である商人たちの集団が複雑であったことが確認できた。一方で、この議論の精度を高めるにはインダス型印章を初めとする各印章の編年を確立する必要性を改めて痛感した。

以下ではメソポタミア地方の編年を考慮しつつ、年代ごとの総括をしておく (表 8)。

前 4 千年紀後半 ~ 3 千年紀初頭：最近のハラッパーの調査では、インダス川流域における印章の使用は文明以前のラーヴィー期 (前 3300 ~ 2800 年頃) にまで遡ることが指摘されている (ケノイヤー 2001: 6-7)。メヘルガル IV 期やアフガニスタンのムンディガク (Mundigak) II・III 期などの区画文印章 (compartmented seals) の影響も考えられる (Shaffer 1987: 146, 148; Allchin and Allchin 1982: 133, 148)。ただし当時はいまだメソポタミア地方との直接的な交易関係には至っていない。

前 2600 ~ 2400 年頃：インダス文明の成立とメソポタ

表8 インダス文明関連の印章出土状況

B.C.	主な土地の編年			メソポタミア地方	エラム・ルリ スターン	ペルシャ湾岸		オマーン湾岸	インダス川流域	パローチス ターン	イラン高原・ シスターン	トルクメニス タン
	メソポタミア 文明	ペルシャ湾岸 (カラート・ アル・バハ レーン)	インダス文 明 (ハラッ パー)			ファイラカ島	バハレーン島					
2800	初期王朝											
2600			3 A	目?					■ ●? 目			
2500			↓						▲			
2400			3B	■? ↑? 0	●? 目						◇	目
2300	初期アッカド		↓	↓	↓							
2200	後期アッカド		3C	?	?							
2100	ウル第3王朝	I a I b II a	↓	↓	↓							
2000	イシニ=ラルサ	II b II c	↓	↓	↓	■? ●						
1900				↓	↓	↓					目	↓
1800	古バビロン王朝			↓	↓	↓						↓
1700												
1600	カッシート王朝	III a				●?						
1400		III b		■?								

■=インダス型印章 □=インダス型印章の封泥 ◇=インダス型印章の押捺痕 0=隅丸方形印章 ●=ペルシャ湾型印章 目=円筒形印章 ▲=プリズム形印章

ミア文明との交易が前 2600 年頃に遡ることは、特産品の紅玉髓製品の出土や初期王朝期の粘土板文書にインダス文明を指すという「メルッハ」の記述があることなどから裏づけられる (Chakrabarti 1978; Possehl 1996; 近藤 2002)。ただし当期のインダス型印章の西方からの確実な報告例はない。

前 2400 ~ 2200 年頃：このインダス文明の最盛期には各地からインダス型印章が出土し、メソポタミア地方南部でもアッカド期 (前 2400 ~ 2200 年頃) に集中する (図 3)。インダス文明の商人が直接当地を訪れていた証である。しかも動物の図柄は短角のウシや一角獣、トラなどインダス文明本土の場合と同様のバリエーションが見受けられる。これにインダスと共通する図柄の隅丸方形印章・前期ペルシャ湾型印章・円筒形印章とメソポタミア固有の円筒形印章、サソリのみを記す帰属不明の方形印章 (Mitchell 1986: No.9) を加えれば、少なくとも合計 6 つの商人集団が「共存」し交易に従事していたことになる。このうち前 4 者は、インダスとメソポタミアを直接往来していたらしい。

このうち前期ペルシャ湾型印章は、メソポタミア地方南部が初現となる可能性さえある。その図柄は短角のウシにほぼ限定され、同じ図柄のインダス型印章を用いる商人集団から派生・分家・婚姻、または出向代理として派遣されるなどした集団を想起させる。文字がインダス語ではなく、また一部が墓に副葬されたことも、彼らがメソポタミアに「帰化」していたことを示唆する。また短角のウシと楔形文字を記した隅丸方形印章については、その図柄から所有者はペルシャ湾型印章の人々とも関係が深かったと考えら

れ、メソポタミア文明側との仲介役のような役職にあったのではなかろうか。

楔形文書に登場する「メルッハの船」(クレンゲル 1983: 55 - 56) や円筒形印章に記された「メルッハの通訳」(Parpola 1994b: 131-2; 世田谷美術館他 2000: No.110) は、こうした当時の交易活動を裏づける。とくにアッカド期の文書の「メルッハの出身者」や「公正なるメスのスイギユウの (神の) 男」といったメソポタミアでは類例のない形容辞がインダス文明からの移住者 (1 世ないし 2 世?) を示す可能性が指摘されている (Parpola et al. 1977: 160-164)。彼らこそが、ペルシャ湾型印章などの所有者ではなかったろうか。

一方インダス型印章と共通する図柄の円筒形印章 (所有者はメソポタミア出身であろう) については、各動物に象徴されるインダスの商人集団との専属の取引契約や集団同士の合併・婚姻関係などを示しているのではなかろうか。メソポタミアとインダス双方からの出土は、かれらも両地方を往復していたことを物語る。

これら多種の印章はこれまで東西を結ぶ海路・陸路上からは未発見であった。ただ当時オマーン湾岸・ペルシャ湾岸東部には「ウンム・アン・ナール文明」(後藤 2000) が栄え、ウンム・アン・ナール島やテル・アブラク (Tell Abraq)、内陸のヒーリー 8 (Hili 8) などからインダス文明の石製分銅や「インダス系の搬入土器」などが出土している (Potts 1992: 103; 後藤 1997: 61)。こうした遺跡から各種印章がさらに発見される可能性は高い。

またオマーン湾岸などではインダス文字を記すプリズム形印章のほか、当地固有の楕円形印章や梨形印章が知られ

(Potts 1992: 110-113)、独自の商人集団を物語る。

さらに陸路に関しては、インダス型印章がインダス文明の「植民地」とも呼ばれるアフガニスタン北部のショルトガイ (Shortughai) (Francfort 1989) やトルクメニスタン地方のアルティン＝デベから出土しており北方の交易活動も活発であった。卍文に代表されるようなこの地方専門のインダスの商人集団がいた可能性もある。一方テベ・ヤヒヤーの押捺痕を残す土器片は、イラン高原も交易対象地域であったことの証である。

逆にメソポタミア文明独自の (インダスの影響の見られない) 円筒形印章の東方からの出土はテベ・ヤヒヤー (Lamberg-Karlovsky 1971a: 91) などの数点に限られ、交易活動がインダスから西へ向けた一方通行的な性格の強いものであった感は拭えない。

前 2200 ～ 1800 年頃：インダス型印章の編年は検討課題であるが、前 2000 年頃になると印章を出土する遺跡が減少するようである (図 4)。メソポタミア地方でもこの時期に特定できるインダス型印章とそれと共通する要素をもつベルシャ湾型印章・円筒形印章は稀となる。インダス文明の商人が自ら大海原に乗り出す機会は激減し、交易のあり方が変化したのであろう。

それは楔形文書にも読み取ることができる。ウル第 3 王朝期の楔形文書にはこの時期のテローなどに「メルッハの息子」(インダス文明出身者の末裔か) たちの「メルッハ村」が形成され、その住民はシュメール風の名前をもち当地の生活に適応していたという (Parpola et al. 1977; Possehl 1996)。こうした記述は古バビロニア期頃 (前 1800 ～ 1600 年頃) に見られなくなっていく。

一方前 2200 ～ 2000 年頃以降のバハレーンでは、短角のウシを基本モチーフとしつつもレイヨウやサソリなど他の動物を併記し、多様な配置や構図の後期ベルシャ湾型印章が登場する。メソポタミア地方から前期ベルシャ湾型印章を用いていた商人の集団が移り住んだ可能性を考慮せねばならない。しかしそれは短角のウシをシンボルとするインダス文明への帰属意識が薄れ、土着化が一層進んだことをも意味し、「パールパール文明」(後藤 2000) が東西交易の要として台頭するのと軌を一にしていた (クレンゲル 1983: 57; 近藤 2002: 383)。その傾向は前 2000 年頃以降に交易拠点がファイラカ島へ移るとさらに顕著となり、もはやインダス文明の影響を読み取るのが困難なディルムン型印章が誕生する。ロータルから発見された印章 (IAR 1964: 9, 10, Pl.XXI; Rao 1985: 308, Pl.CLXI-B) や、バハレーンなどで発見されたプリズム形印章もこの時期であろうか。

北方交易ではアルティン＝デベからこの時期にもインダス型印章が出土し、前 2 千年紀初頭まで交易活動が維持さ

れていたようである。

その後、前 1800 年前後にはインダス文明は解体する。しかし各地に個別の地方文化が台頭し一部で独自の印章が用いられている²⁶⁾。一方この時期にもメソポタミア文明の円筒形印章の東方からの発見例はない²⁷⁾。唯一、インド中部のナグプル中央博物館が所蔵するアダド神と楔形文字を記した円筒形印章 (バビロン第 1 王朝) が知られるが (Suboor 1914)、その発見場所や入手先等については不明である。

謝辞

本稿は、日本西アジア考古学会定例研究会 (2000 年 11 月 11 日) において発表した『インダス文明から見たアラビア湾岸「文明」とメソポタミア文明』に基づいて再構成したものです。発表の機会を頂いたこととともに、本誌への掲載に尽力された編集委員会の方々には深く感謝致します。また本稿の執筆に際してアスコ・バルボラ、後藤健、近藤英夫の各氏から様々な助言を頂いたほか、資料収集についてもバルボラ氏のほか M. K. クルカルニー、三ツ堀幸男の各氏にご配慮頂きました。心からお礼申し上げます。

註

- 1) インダス文明の遺跡が分布する、現在のパキスタン中・南部からインド北西・西部にまたがる土地。すなわちマクラーン地方、シンド地方、パンジャブ地方、グジャラート地方。これにアフガニスタン北部の一部 (ショルトガイ) を含める。
- 2) Parpola 1994a: No.22, 29, 30, 38, 39 の引用文献参照。一方、インダス型印章はすでに 1870 年代にハラッパーから出土していたが (Cunningham 1875)、上記のメソポタミア地方の報告例との比較検討には至らなかったようである。
- 3) バハレーン島から 86 点 (Al-Sindi 1999)、ファイラカ島から 5 点 (Kjærum 1994: 348)、ウルを初めとするメソポタミア南部各地やエラム地方のスーサから 14 点 (Potts 1992: 159-165; Parpola 1994a)、イラン高原のテベ・ヤヒヤーから 2 点 (Lamberg-Karlovsky 1971a)、モヘンジョ・ダロとチャヌフ・ダロから 5 点 (Mackay 1931b: 375-404; Mackay 1938: 343, 385; 1943: 50, 292)。
- 4) アブ・ダビ 1 点、バハレーン島 235 点 (Al-Sindi 1999)、ファイラカ島 350 点 (Kjærum 1994: 341-350)、メソポタミア南部やエラム地方からアフガニスタンにかけて 20 点 (Potts 1992: 198-200)、インダス文明のロータルから 1 点 (IAR 1964: 10, Pl.XXI-B)。
- 5) ただし各分類の名称については、研究者によってその使用にやや混乱が見られる (Mitchell 1986; Al-Sindi 1999)。
- 6) ファイラカ島とバハレーン島出土の円形印章全体の集成にはそれぞれ (Kjærum 1983; Al-Sindi 1999) がある。
- 7) 図柄を含むインダス型印章の編年の把握は今後の大きな課題である。また裏面の鈕に基づいてより正確な編年的位置づけが可能であることを、(野口 2002) が論じている。
- 8) ロータルの銅製印章 1 点 (Rao 1987: 314, Pl.CLIV-C; Joshi and Parpola 1987: L-44)。図柄は一角獣。鈕は (水平方向に) リング状をなす。

モヘンジョ・ダロの銀製印章 2 点 (Mackay 1938: 348, 370, 385, Seal Nos.16 and 520; Joshi and Parpola 1987: M-317; Shah and Parpola 1991: M-1199)。いずれも図柄は一角獣。鈕は M-

317では沈線をもつ典型的なインダス型、M-1199は(水平方向に)リング状をなす。

またとくにモヘンジョ・ダロの編年については、1920～30年代当時に設定されたものとインダス文明の編年の最新の基準となるハラッパーにおける編年との照合が試みられている(Kenoyer 1991)。これによれば、モヘンジョ・ダロのIntermediate～Late Periodがおおよそハラッパー3A～C期(インダス文明期、前2600～1900年頃)に相当する。モヘンジョ・ダロの銀製印章は出土層位から、ハラッパーの編年ではそれぞれ3A期と3C期頃と推測できる(Mackay 1938: xiv, xv)。

- 9) ただし卍の鉤の部分の向きについては左向きと右向きとがあり、その象徴的意味は異なっていたかもしれない。
- 10) 円形の鈕をもつ印章には、印面の図柄に9つの同心円文が並ぶ(Joshi and Parpola 1987: M-128)や一角獣(Shah and Parpola 1991: M-696)などがある。むしろインダス文明本土の卍文の印章の鈕は、(図6-9)と同じく方形のものが多い。
- 11) 印面に2文字のみを記す例としては(Joshi and Parpola 1987: M-329, M-330, H-102)などがある。また方形の鈕の例には(Joshi and Parpola 1987: M-313, M-318, L-69, L-73, K-53; Shah and Parpola 1991: M-1171, M-1183, M-1195, M-1198, M-1246, M-1248, M-1259, H-619)などがある。後者では卍文や十字文、幾何学文など特定の図柄が多数を占めることから、鈕が未完成であったとは考えにくい。
- 12) もっとも可能性の高い解釈は「SAK-KU-SI」であるという(Parpola et al. 1977: 156)。
- 13) アスコ・パルボラ氏のご教授による。
- 14) これに酷似する図柄にバハレーン島とファイラカ島から発見された6頭のレイヨウの頭を同じく放射状に配した円形印章がある(Al-Sindi 1999: No.184; Kjærnum 1983: No.1)。いずれもデイルムン型で、前2000～1850年頃とされる。ロータルからデイルムン型印章が発見されていることから(Rao 1985: 308, Pl.CLXI-B)、インダス文明とデイルムン型印章とは少なくとも一時期共存しており、図柄なども相互に影響を与えた可能性が高い。
- 15) このような形態の起源は貝製の円形印章にあり、ペルシャ湾型よりもさらに数百年遡る伝統をもつ可能性が指摘されている(Al-Sindi 1999: 13)。
- 16) ポスト・ウル第3王朝から初期イシニ＝ラルサ期の所産と考えられる楔形文字粘土板文書が(図11-1)の印章に伴出した(Brunswick et al. 1983: 108)。
- 17) 石室からの共伴遺物には赤色土器の破片のほか貝製の指輪3点、ビーズ2点などがある。人骨はほとんど残存していない(Srivastava 1991: 37, 100)。
- 18) ちなみにこれは搬入品と考えられている(Mackay 1938: 332; Joshi and Parpola 1987: No.353)。
- 19) ペルシャ湾型からデイルムン型への移行を示す「プロト・デイルムン型」を設定する見方もあるが(Kjærnum 1994: 345; Potts 1990: 168)、その定義はまちまちでこれを厳密に抽出するのは現状では難しい。本稿では「頭を垂れた短角のウシ」を中心にインダス型印章の影響が色濃い動物の図柄とインダス文字を重視して扱い、「プロト・デイルムン型」の抽出は試みていない。
- 20) とくにこのうち(図13-3)では「体の片側のみヒレをもつサカナ」という本来のインダス文字にはないバリエーションであるため、文字はD類に分類されている(Parpola 1994a: No.20)。
- 21) Santoni 1984; Musée National 1988: No.139; Jarrige and Hassan 1989; Shah and Parpola 1991: No.Sb-2, Sb-3; Knox 1994; During Caspers 1998; コロン 1996: No.596, 597; 後藤 1999: 80-81
- 22) パルボラ氏のご教授による。
- 23) ただしトリヤヘビは護符(土製小板)に類似例が見られることから、印章と護符それぞれの図柄の比較はさらに検討する必要がある。
- 24) この図柄はインダス文明のなかでも「戦い」を表現したほぼ唯一の例でもある。
- 25) 印面が曲面をなす円筒形印章への細工と印面が平坦な方形印章への細工は、技術的におのずと異なる。方形印章の細工に熟達した職人でも、十分な訓練を経ずに円筒印章へ細工することは難しいであろう。
- 26) バローチスターン地方のピラク(Pirak)(Jarrige and Santoni 1979)の円形の幾何学文印章、インド西部・グジャラート地方のラングプル(Rangpur)やブラパース・パタン(Prabhas Patan)から発見された両面に動物などを記した円形と方形の印章(Bhattacharyya 1991; Dhavalikar 1997: 102)、インド中部のマスキ(Maski)やダイマーバード(Daimabad)から発見された円筒形印章や円形印章(Joshi and Parpola 1987: 352, 353, 358; Sali 1986: 501-511)などがあげられる。
- 27) ファイラカ島までであれば、前2千年紀前半頃のメソポタミア文明の円筒形印章が60点ほど出土している(Kjærnum 1983: 154-171)。

参考文献

- Al-Sindi, Kh. M. (M. A. Al-Khozai tr.) 1999 *Dilmun Seals*. Bahrain, Ministry of Cabinet Affairs and Information, Bahrain National Museum.
- Allchin, B. and R. Allchin 1982 *The Rise of Civilization in India and Pakistan*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Amiet, P. 1988 La vallee de l'Indus et le monde de l'Iran. In Musée National des Arts Asiatiques, *Les cites oubliées de l'Indus: Archeologie du Pakistan*, 194-195. Paris, Musée National des Arts Asiatiques Guimet.
- Bhattacharyya, R. 1991 Rangpur Seal - Probable Egyptian Connection of the Harappan Civilization. *Man and Environment* 16/1: 53-58.
- Bibby, G. 1958 The 'Ancient Indian Style' Seals from Bahrain. *Antiquity* 32: 243-246.
- Bissing, F. W. von 1927 Ein vor etwa 15 Jahren erworbenes "Harappa-Siegel". *Archiv für Orientforschung* 4/1: 21-22.
- Brunswick, R. H., A. Parpola and D. Potts 1983 New Indus Type and Related Seals from the Near East. In D. T. Potts (ed.), *Dilmun- New Studies in the Archaeology and Early History of Bahrain*, 101-115. Berlin, Dietrich Reimer Verlag.
- Buchanan, B. 1979 *Near Eastern Seals in the Yale Babylonian Collection*. New Haven. Yale University Press.
- Chakrabarti, D. K. 1978 The Nippur Indus Seal and Indus Chronology. *Man and Environment* 2: 88-90.
- Cleuziou, S. 1992 The Oman Peninsula and the Indus Civilization: A Reassessment. *Man and Environment* 17/2: 93-103.
- Cleuziou, S. 2002 The Early Bronze Age of the Oman Peninsula from Chronology to the Dialects of Tribe and State Formation. In S. Cleuziou, M. Tosi and J. Zarins (eds.), *Essays on the Late Prehistory of the Arabian Peninsula*, 191-236. Roma, Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente.
- Cleuziou, S. and S. Mery 2002 In-Between the Great Powers the Bronze Age Oman Peninsula. In S. Cleuziou, M. Tosi and J. Zarins (eds.), *Essays on the Late Prehistory of the Arabian Peninsula*, 273-316. Roma, Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente.

- Cleuziou, S., J. Reade and M. Tosi (eds.) 1990 *The Joint Hadd Project. Summary Report on the Third Season (October 1987-February 1988)*. Compiled and distributed by the Joint Hadd project.
- Collon, D. 1996 Mesopotamia and the Indus: the Evidence of the Seals. In J. Reade (ed.), *The Indian Ocean in Antiquity*, 209-225. London, Kegan Paul International.
- Corbiau, S. 1936 An Indo-Sumerian Cylinder. *Iraq* 3: 100-103.
- Cunningham, A. 1875 Harappa. *Archaeological Survey of India Report for the Year 1872-73*: 105-108.
- Dhavalikar, M. K. 1997 *Indian Protohistory*. New Delhi, Books & Books.
- During Caspers, E. C. L. 1979 Statuary in the Round from Bahrain. In J. E. van Lohuizen-de Leeuw(ed.), *South Asian Archaeology 1975*, 58-75. Leiden, E. J. Brill.
- During Caspers, E. C. L. 1982 Sumerian Traders and Businessmen Residing in the Indus Valley Cities- A Critical Assessment of the Archaeological Evidence. *Annali, Istituto Orientale di Napoli* 42/3: 337-379.
- During Caspers, E. C. L. 1998 The MBAC and the Harappan Script. *Ancient Civilizations from Scythia to Siberia* 5/1: 40-58.
- Francfort, H.-P. 1989 *Fouilles de Shortughai Recherches sur L'Asie Centrale Protohistorique*, 2 Vols. Paris, Boccard.
- Frankfort, H. 1965 (rep. of 1939) *Cylinder Seals*. London, Gregg Press.
- Gadd, C. J. 1932 Seals of Ancient Indian Style Found at Ur. *Proceedings of the British Academy* 38: 191-210.
- Gadd, C. J. and S. Smith 1924 The New Links Between Indian and Babylonian Civilizations. *Illustrated London News*. October 4 1924: 614-616.
- Gibson, M. 1977 An Indus Valley Stamp Seal from Nippur, Iraq. *Man and Environment* 1: 67, Pl.VIII-C.
- Hallo, W. W. and B. Buchanan 1965 A "Persian Gulf Seal" on an Old Babylonian Mercantile Agreement. *Assyriological Studies* 16: 199-209.
- Højlund, F. 1989 Some New Evidence of Harappan Influence in the Arabian Gulf. In K. Frifelt and P. Sørensen (eds.), *South Asian Archaeology 1985*, 49-53. London, Curzon Press.
- Højlund, F. 1994 Summary and Conclusions. In F. Højlund and H. H. Andersen (ed.), *Qala'at al-Bahrain Vol.1 The Northern City Wall and the Islamic Fortress*, 463-481. Aarhus, Jutland Archaeological Society.
- Hunter, G. R. 1932 Mohenjo-Daro – Indus Epigraphy. *Journal of the Royal Asiatic Society* 1932 : 466-503.
- IAR 1964 Excavations at Lothal, District Ahmadabad. *Indian Archaeology: A Review 1961-62* : 9-10.
- Jarrige, J.-F. and M. U. Hassan 1989 Funeral Complexes in Baluchistan at the End of the Third Millennium in the Light of Recent Discoveries at Mehrgarh and Quetta. In K. Frifelt and P. Sørensen (eds.), *South Asian Archaeology 1985*, 150-166. London, Curzon Press.
- Jarrige, J.- F. and M. Santoni 1979 *Fouilles de Pirak*. 2 Vols. Paris, Diffusion de Boccard.
- Joshi, J. P. and A. Parpola 1987 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions 1. Collections in India*. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Kenoyer, J. M. 1991 Urban Process in the Indus Tradition: A Preliminary Model from Harappa. In R. H. Meadow (ed.), *Harappa Excavations 1986-1990*, 29-60. Madison, Prehistory Press.
- Kjærøum, P. 1983 *Failaka / Dilmun the Second Millennium Settlements Vol.1 The Stamp and Cylinder Seals*. Aarhus, Jysk Arkaeologisk Selskab.
- Kjærøum, P. 1994 Stamp-seals, Seal Impressions and Seal blanks. In F. Højlund and H. H. Andersen (ed.), *Qala'at al-Bahrain Vol.1 The Northern City Wall and the Islamic Fortress*, 319-350. Aarhus, Jutland Archaeological Society.
- Knox, R. 1994 A New Indus Valley Cylinder Seal. In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *South Asian Archaeology 1993*, Vol.1, 375-378. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.
- Lamberg-Karlovsky, C. C. 1970 *Excavations at Tepe Yahya, Iran 1967-1969*. Cambridge, Peabody Museum, Harvard University.
- Lamberg-Karlovsky, C. C. 1971a The Proto-Elamite Settlement at Tepe Yahya. *Iran* 9: 87-95.
- Lamberg-Karlovsky, C. C. 1971b Excavations at Tepe Yahya. *Artibus Asiae* 3/4: 302-306.
- Langdon, S. 1931 A New Factor in the Problem of Sumerian Origins. *Journal of the Royal Asiatic Society* 1931: 593-596.
- Langdon, S. 1932 Another Indus Valley Seal. *Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* (1932): 47-48.
- Mackay, E. 1925 Sumerian Connection with Ancient India. *Journal of the Royal Asiatic Society* (1925): 698-701.
- Mackay, E. 1931a Further Links between Ancient Sind, Sumer and elsewhere. *Antiquity* 5: 459-473.
- Mackay, E. 1931b Seals and Seal Impressions, Copper Tablets and Tabulation. In J. Marshall (ed.), *Mohenjo-daro and the Indus Civilization*. Vol.II, 370-405. London, Probstain.
- Mackay, E. 1938 *Further Excavations at Mohenjo-daro*. 2 Vols. New Delhi, Government of India.
- Mackay, E. 1943 *Chanhu-daro Excavations 1935-36*. Boston, American Oriental Series.
- Marshall, J. 1924 First Light on a Long-Forgotten Civilisation. *The Illustrated London News*. September 20, 1924: 528-532.
- Marshall, J. (ed.) 1931 *Mohenjo-daro and the Indus Civilization*. 3 Vols. London, Probstain.
- Masson, V. M. (H. N. Michael tr.) 1988 *Altyn-Depe*. Philadelphia, The University Museum.
- Masson, V. M. 1999 Bronze Age in Khorasan and Transoxania. In A. H. Dani and V. M. Masson (eds.), *History of Civilizations of Central Asia*, Vol.I, 225-245. Delhi, Motilal Banarsidass.
- Mitchell, T. C. 1986 Indus and Gulf Type Seals from Ur. In Shaikha Haya Ali Al Khalifa and M. Rice (eds.), *Bahrain Through the Ages- Archaeology*, 278-285. London, KPI.
- Musée National des Arts Asiatiques 1988 *Les cites oubliées de l'Indus: Archeologie du Pakistan*. Paris, Musée National des Arts Asiatiques Guimet.
- Nayeem, B. A. 1992 *Bahrain*. Hyderabad, Hyderabad Publishers.
- Oppenheim, A. L. 1954 The Seafaring Merchants of Ur. *Journal of American Orietal Society* 74: 6-17.
- Parpola, A. 1994a Harappan Inscriptions- An Analytical Catalogue of the Indus Inscriptions from the Near East. In F. Højlund and H. H. Andersen (eds.), *Qala'at al-Bahrain, Vol.1 The Northern City Wall and the Islamic Fortress*, 304-315. Aarhus, Jutland Archaeological Society.
- Parpola, A. 1994b *Deciphering the Indus Script*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Parpola, S., A. Parpola and R. H. Brunswig 1977 The Meluhha Village- Evidence of Acculturation of Harappan Traders in Late Third Millennium Mesopotamia. *Journal of the Economic and Social History of the Orient*. 20/2: 129-165.
- Porada, E. 1971 Remarks on Seals Found in the Gulf States. *Artibus Asiae* 33/4: 331-338.
- Possehl, G. L. 1996a *Indus Age The Writing System*. New Delhi, Oxford &

- IBH Pub.
- Possehl, G. L. 1996b Meluhha. In J. Reade (ed.), *The Indian Ocean in Antiquity*, 133-208. London, Kegan Paul International.
- Potts, D. T. 1992 *The Arabian Gulf in Antiquity, Vol. I-From Prehistory to the Fall of the Achaemenid Empire*. Oxford, Clarendon.
- Rao, S. R. 1985 *Lothal a Harappan Port Town 1955-62*. Vol.2., New Delhi, Archaeological Survey of India.
- Sali, S. A. 1986 *Daimabad 1976-79*. New Delhi, Archaeological Survey of India.
- Santoni, M. 1984 Sibri and the South Cemetery of Mehrgarh: Third Millennium Connections between the Northern Kachi Plain (Pakistan) and Central Asia. In B. Allchin (ed.), *South Asian Archaeology 1981*, 52-60. Cambridge, Cambridge University Press.
- Sayce, A. H. 1924 Remarkable Discoveries in India. *Illustrated London News*, September 27 1924: 566.
- Scheil, V. 1925 Un Nouveau Sceau Hindou Pseudo-Sumérien. *Révue d'Assyriologie* 22: 55-56.
- Shaffer, J. G. 1987 The Later Prehistoric Periods. In F. R. Allchin and N. Hammond (eds.), *The Archaeology of Afghanistan*, 71-186. London, Academic Press.
- Shah, S. G. M. and A. Parpola 1991 *Corpus of Indus Seals and Inscriptions 2. Collections in Pakistan*. Helsinki, Suomalainen Tiedekatemia.
- Sharma, D. P. 2000 *Harappan Seals, Sealings and Copper Tablets*. New Delhi, National Museum.
- Srivastava, K. M. 1991 *Madinat Hamad Burial Mounds 1984-85*. Bahrain, Bahrain National Museum.
- Srivastava, K. M. 1997 An Inscribed Indus Seal from Bahrain. In J. P. Joshi (ed.), *Facets of Indian Civilization*, Vol.1, 92-102. New Delhi, Aryan Books International.
- Suboor, M. A. 1914 A Note on a Babylonian Seal in the Central Museum, Nagpur. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 10/11: 461-463.
- Vats, M. S. 1940 *Excavations at Harappa*. 2 Vols., Delhi, Government of India.
- Vine, P. (ed.) 1993 *Bahrain National Museum*. London, Immel Publishing.
- Vogt, B. 1996 Bronze Age Maritime Trade in the Indian Ocean: Harappan Traits on the Oman Peninsula. In J. Reade (ed.), *The Indian Ocean in Antiquity*, 107-132. London, Kegan Paul International.
- Ward, W. H. 1910 *The Seal Cylinders of Western Asia*. Carnegie Institution of Washington.
- Weisgerber, G. 1983 Copper Production during the Third Millennium BC in Oman and the Question of Makan. *The Journal of Oman Studies* 6/2: 269-276.
- Weisgerber, G. 1984 Makan and Meluhha-Third Millennium BC Copper Production in Oman and the Evidence of Contact with the Indus Valley. In B. Allchin (ed.), *South Asian Archaeology 1981*, 196-201. Cambridge, Cambridge University Press.
- Wheeler, M. 1958 Comments to G. Bibby. *Antiquity* 32: 246.
- Wheeler, M. 1979 (Third ed.) *The Indus Civilization*. Cambridge, Cambridge University Press.
- NHK・NHK プロモーション編 2000『世界四大文明 インダス文明展』NHK・NHK プロモーション。
- クレンゲル、H. 1983『古代オリエント商人の世界』山川出版社。
- ケノイヤー、J. M. 2001「インダス文明－美術工芸、象徴デザイン、技術を探る」『オリエンテ』23号 3-19頁。
- 小磯学 2002「インダス文明における動物表現」『日々の考古学』393-408頁 東海大学考古学教室開設20周年記念論文集編集委員会。
- 後藤健 1997「アラビア湾岸における古代文明成立」『東京国立博物館紀要』32号 15-144頁。
- 後藤健 1999「遺物の中の遺物－インダス文明の遺物から」『考古学雑誌』84巻4号 70-88頁。
- 後藤健 2000「インダスとメソポタミアの間」近藤英夫編『NHKスペシャル四大文明インダス』178-192頁 日本放送出版協会。
- コロン、D. (久我行子訳) 1996『円筒印章』東京美術。
- 近藤英夫 2000「インダス文明の年代についての一考察」『日々の考古学』381-392頁 東海大学考古学教室開設20周年記念論文集編集委員会。
- 近藤英夫 2001「デイルムンの円形印章の年代について」『東海史学』36号 27-35頁。
- 世田谷美術館・NHK・NHK プロモーション編 2000『世界四大文明 メソポタミ文明展』NHK・NHK プロモーション。
- 永嶺結季 2000「インダス文明の宗教－ボダイジュと角の信仰」『インド考古研究』21号 59-68頁。
- 野口雅央 2002「インダス文明における印章研究の新視点」東海大学文学部2001年度卒業論文。
- ビビー、J. (矢島文夫、二見史郎訳) 1975『未知の古代文明デイルムン』平凡社。

小磯学
東海大学文学部
Manabu KOISO
Tokai University